第３遺構面　11～12世紀の遺構面である。２トレンチでは、良好な遺物包含層が検出され、掘立柱建物数棟、南北方向の溝４条が検出された。３トレンチでは、遺構、遺物量は少なく、土坑が２基検出されたのみである。４トレンチでは、井戸、土坑、掘立柱建物が数棟検出された。

４トレンチ
ＳＥ201　直径 240㎝、深さ 280㎝の掘形をもつ井戸である。

板材20枚で作られた直径 60㎝の桶の底を抜き、水溜に転用している。竹のタガの痕跡が認められたが、遺存状況は悪い。水溜の上部から、曲物が壊れた状態で検出された。検出状況から、水溜の上に据えられていたと考えられる。井戸内からの遺物の出土はなかったが、水溜部分に円礫が充填されていた。井戸廃棄時に投げ入れられたと考えられる。

第４遺構面
（上層）　８世紀後半の遺構面である。遺構の密度は２トレンチにおいて高く、掘立柱建物、井戸、溝等が検出されている。３トレンチでは、土坑、柱穴、溝等の遺構が少数検出された。４トレンチでは焼成土坑、掘立柱建物等が検出された。

２トレンチ
ＳＥ401　直径約 2.1ｍ、深さ 1.2ｍの掘形に、外径約 60㎝の井戸側を設置している。井戸側の北半部は直径約 60㎝の針葉樹をくり抜いて使用しているが、南半部は遺存状況が悪く、詳細は不明である。井戸側内には１辺 44㎝×39㎝、高さ 55㎝の枡を設置し、その上に曲物を置き、５から７㎝程度の円礫を裏込めに使用して固定している。曲物の遺存状況は悪く、繊維が横方向に確認できるにすぎない。枡は精巧に作られており、欅を転用している可能性がある。

第４遺構面
（下層）　６世紀前半の遺構面である。２トレンチにおいて、掘立柱建物、溝、土坑等が検出されている。多量の遺物を有する遺構が多い。

２トレンチ
ＳＢ401　１辺 60～70㎝、深さ 50～60㎝の方形掘形を持つ掘立柱建物が検出された。３間以上×４間の規模で、総柱である。柱を抜き取った後、礎を埋置している例が１例ある。

ＳＤ401　８～10区で、幅約５メートル、深さ 1.2ｍの溝が１条検出された。埋土から遺物が多量に出土し、杯身、杯蓋の他に、高杯の出土が多い。北側肩部が２段に落ち込み、人為的に設置された溝であると考えられる。層位的にはＳＢ401に先行するが、両遺構とも６世紀前半に納まる。

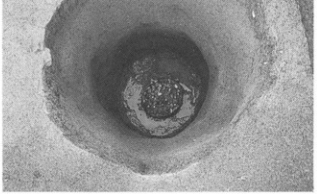


fig. 536　ＳＥ201

fig. 537　ＳＥ401

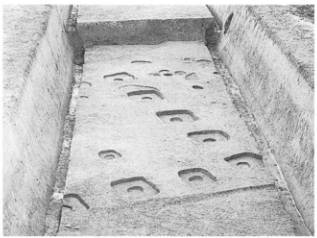


fig. 538　SB401

fig. 539　SB4002

第5遺構面　　5世紀末の遺構面である。

（上層）　　北半部で、竪穴住居11棟、屋外炉2基が検出された。

2トレンチ　竪穴住居は全て方形で、1辺4m弱の規模である。滑石製臼玉、製塩土器を伴う住居が多いことが特筆される。

3トレンチ　微高地から東側に緩やかに傾斜する低湿地された。直上の堆積土から、古墳時代中期末から後期にかけての遺物が出土したが、顕著な遺構は存在しない。

4トレンチ　竪穴住居2棟が検出された。

SB6003　1辺4.2mの方形の竪穴住居である。4本柱を持ち、周壁溝を巡らす。南壁に竈を作り付けている。遺物は床面に置かれた状態のものと、屋根材と考えられる炭化物の上から検出されたものが、10個体弱出土した。竈は、燃焼部の壁の一部と煙道部分が残る。南側に竈を作り付ける例は珍しい。竈内から鍋が1点検出された。支脚は残されていなかったが、

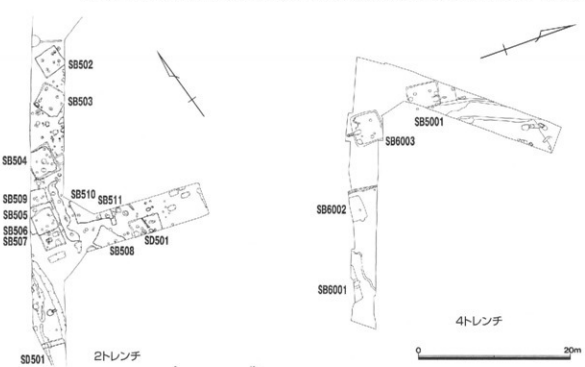


fig. 540　第5遺構面平面図

床面に火熱で変色した部分があり、支脚の位置が特定できる。

ＳＢ5001　1辺4.1mの方形の竪穴住居で、4本柱を持ち、周壁溝を巡らす。北壁に竈を作り付けている。遺物が豊富に残されており、約10個体が床面で検出された。初期須恵器と考えられる須恵器大甕の破片が1点出土しており、ＳＸ5002との並行関係が注目される。竈は、燃焼部の壁の一部と煙道部分が残り、天井部は残されていない。竈内から、支脚に使われた倒立状態の高杯、完形の鍋、鍋を竈に据えるときに使われた別個体の土器片が出土した。支脚は原位置を保っている。燃焼部の床面、壁、崩落した天井部は固く焼け締まっている。

ＳＢ6001　1辺4.6mの方形竪穴住居の一部が検出された。柱穴、周壁溝は検出されなかった。北辺の中央部に、竈を作りつけている。竈は、燃焼部の壁と煙道部分が残り、天井部が崩落した状態で検出された。竈内から、支脚に使われた倒立状態の高坏、完形の鍋、鍋を竈に据えるときに使われた、別個体の土器片が出土した。支脚は原位置を保っている。燃焼部の床面、壁、崩落した天井部は固く焼け締まっている。

ＳＸ5002　1辺4.6m以上の方形のプランを持つ遺構である。埋土から、大量の土器と共に、5300点を越す滑石製品が出土した。須恵器の比率は極めて低いが、樽型甕が1点出土している。土師器は高杯、蛸壺が大半を占め、壷が少数混じる。特筆されるのは、滑石製品で、双孔円板、勾玉、剣形、臼玉等が出土している。臼玉の出土数が圧倒的に多い。滑石製品の出土分布に偏りが見られ、土器集積後に遺構の西部を中心に玉類が撒かれたと考えられる。玉類を使用した祭祀を復元する上での好資料である。

第5遺構面　2トレンチにおいて、竪穴住居3棟、掘立柱建物が多数検出された。

（下層）　長辺約4ｍ×短片約3.8ｍの方形のプラン内に、臼玉20数点を含む遺物の集積があった。

2トレンチ　その下層に焼土、炭化層があり、炭化層直上で完形の須恵器杯蓋・杯身が3点出土した。

ＳＢ512　化層を取り除くと住居の床面が検出された。壁高は約30㎝で、周壁溝を持ち、4本柱である。竈は、甕設置部の内径30㎝、燃焼部内径20㎝、高さは壁高（検出高）と一致する。支脚は土師器高杯を倒立状態で使用しており、酸化して赤変している。甕の大半の破片は、煙道部側に押し込まれた状態で検出された。煙道部も残存している。

ＳＢ513　1辺約7.5ｍの方形の竪穴住居である。北側の壁は失われていたが、南側の壁高は60

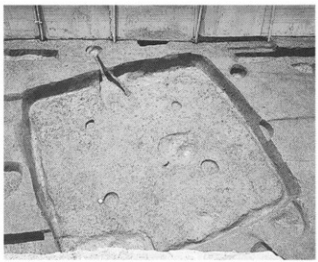


fig. 541　ＳＢ6003

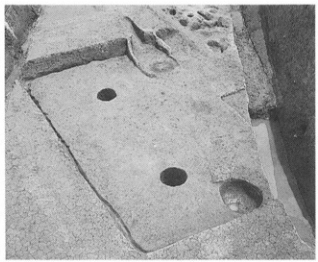


fig. 542　ＳＢ5001

cmを測り、周壁溝を巡らす。

S B514　南東部分のコーナー部分が検出された。周壁溝と考えられる溝が存在し、竪穴住居の一部であると考えられる。

掘立柱建物群　直径60～80cm、深さ約80cmの掘形を持つ柱穴が多数検出された。建物の規模等は検討中であるが、柱の配列は磁北方向及びそれに直交するものが多い。掘形及び柱痕の規模等から、倉庫または有力者の居館クラスの建物が存在したと考えられる。

S D514　幅120cm、深さ40cmの溝状遺構である。埋土より古墳時代中期後半の多量の遺物が出土した。投棄された状況で出土しており、製塩土器の一括出土が特記される。

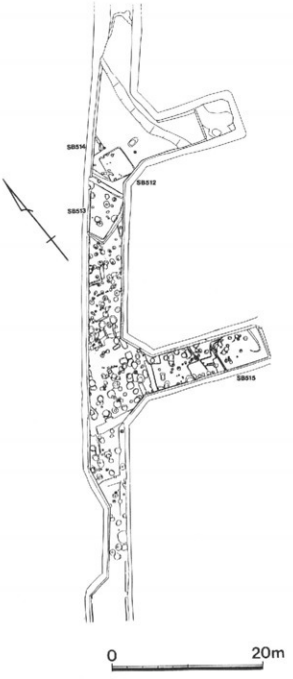


fig. 543　2トレンチ第5遺構面下層平面図

fig. 544　2トレンチ第5遺構面全景

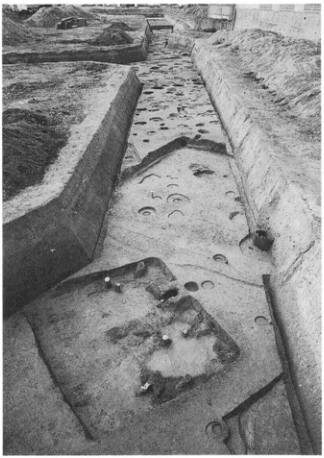


fig. 545　2トレンチ第5遺構面下層全景

第6遺構面　5世紀中頃の遺構面である。2トレンチで、柱穴、土坑等が数基出土した。4トレンチでは、古墳時代以前の明瞭な遺構は検出されず、様相は不明である。東に傾斜する堆積土から、弥生時代中期後半の遺物が若干検出されたが、遺構には伴わない。

第7遺構面　弥生時代前期から中期の遺構面である。2トレンチにおいて、標高約7mの自然堤防上で、中期中葉の周溝墓、溝1条、中期前半の溝1条、中期の溝3条と埋葬施設1基、前期前半の埋葬施設が検出された。

SD8002　幅190cm、深さ20cmの溝状遺構である。Ⅲ様式古段階の壺が3点検出された。

SD8004　幅200cm、深さ90cmの溝状遺構である。Ⅱ様式の遺物が検出された。器種のバリエーションが豊富である。また、滑石・璧玉などの原石と、製作に使用された珪化木製の石鋸が出土しており、当遺跡における玉造開始期の一括資料である。

ST8001　長さ200cm、幅100cmの堀形を持つ埋葬施設である。長さ160cm、幅45cmの木棺と考えられる痕跡が確認された。遺物の出土はないが、SD8004との切り合い関係から、Ⅱ様式以降の埋葬施設である。付帯施設は確認されなかった。

溝状遺構　微高地の南端部に作られた埋葬施設で、ほぼ南北方向に彫られた検出長約13m、幅1.4mの溝状遺構である。溝状遺構がある程度埋まった段階で、それぞれに墓孔を掘り、3体の人骨と大型の鉢が倒立状態で検出された。2体は比較的良好に遺存していた。

人骨1　長さ155cm以上、幅50cmの方形に掘られた墓坑に、仲展仰臥の姿勢で埋葬されている。身長155～160cmの30代の男性である。ほぼ全身の骨が残り、頭位は北である。頭骨は土圧により陥没し、手骨は腰骨の下に合わせた状態である。がっしりした顎や頑丈な頭骨の他に、湾曲した四肢長骨など、縄文人の骨格に一般的な特徴を数多く持っている。また、上下の犬歯を抜歯している。椎骨の付近からサヌカイト製石鏃が1点検出され、椎骨のいずれか1個の骨体に刺さっていた可能性がある事が特記される。

人骨2　歯と上下の顎骨、四肢長骨のいずれかと考えられる痕跡が検出された。頭位は北で、うつ伏せに埋葬されている。死亡年齢は30～50歳で性別は不明である。

人骨1と同様、胸部から石鏃が1点検出されたこと、犬歯を抜歯している事が特記される。

人骨3　長さ200cm、幅50cmの方形に掘られた墓坑に、仲展仰臥の姿勢で埋葬されている。底部及び側面に、木質の痕跡が確認され、木棺の存在が推定される。身長160cm前後の30～60歳の男性である。骨格は左脚部を除き、ほぼ全身骨が残る。頭位は北である。人骨1と同様、縄文人に一般的な特徴を数多く持っている。第2小臼歯、第1大臼歯が、頬側に傾斜した特異な咬耗をしており、咀嚼以外の用途に使用されたことを示している。上半身を中心に17本のサヌカイト製石鏃が検出された。硬質部に当たり、その衝撃で先端が折れて残っている例があり、数本は死亡時に受傷している事が特記される。

円形周溝墓　微高地の縁端部で弧を描く溝が検出された。体部が穿孔されている壺が2点あり、供献土器と考えられる。調査区の制約により全容は明らかではないが、Ⅲ様式古段階の、直径約8mの円形周溝墓の周溝であると考えられる。

方形周溝墓　北側と西側の周溝のみ検出された。幅約120cm、深さ70cmの溝状遺構が直交し、陸橋部を掘り残している。北側の周溝からは、溝底から50cm程浮いた状態で大型の壺が検出さ

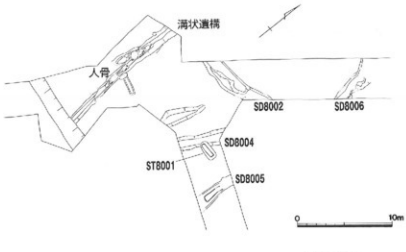


fig. 546
2トレンチ
第7遺構面平面図

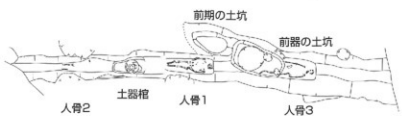


fig. 547
溝状遺構平面図

fig. 548　人骨1・3出土状況平面図・断面図

fig. 549　人骨1出土状況

fig. 550　人骨3出土状況

れた。その下層から、幅50㎝、長さ160㎝、深さ15㎝の方形の掘形をもつ墓孔から人骨の痕跡が検出された。頭位は東で、仰臥伸展の姿勢である。遺存状況は悪く、頭骨と両脚の痕跡が認められるのみで、性別、死亡年齢は不明である。脚部の直下で、サヌカイト製石鏃が1点検出された。遺体に伴う遺物であるかどうかは出土状況からは確定できない。

B～F区

約半年間放置されていたため、調査区の壁面及び底面は著しく損傷を受けていた。排水後、泥溝化した堆積土を除去したが、現況では遺構と撹乱の判別が困難であるため、便宜上、全てを撹乱として扱い、今回新たに検出された遺構のみ4桁の遺構番号を付し、前回調査の遺構番号との混乱を避けた。前回調査時作成実測図と整合性を持たせるため、平面調査が必要なD区・E区・F－S区については、現況の実測図を作成した。B区・C区・F－N区については、壁面の精査と、3箇所のトレンチ調査を実施した。

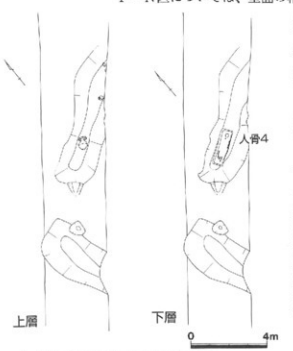


fig. 551　方形周溝墓（ＳＤＸ001）平面図

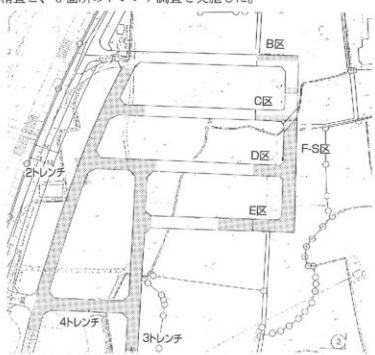


fig. 554　調査区設定図

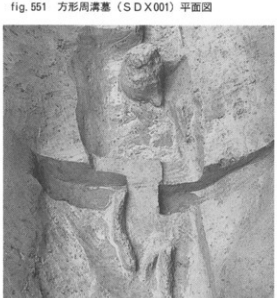


fig. 552　方形周溝墓内人骨4

fig. 553　円形周溝墓

復旧遺構面　弥生時代前期から古墳時代中期の遺構が同一面で検出されていた。

F－S区　直径約35cm、深さ30cmの円形の土坑内より、2個体の製塩土器が、口縁を合わせた状態で出土した。黒褐色シルト質砂質土より、炭化物が少量検出されている。遺構の性格は不明である。古墳時代中期の遺構である。

SD5001　幅約150cm、深さ30cmの溝状遺構である。東側は完結している。埋土より、5個体以上の完形に復元できる土器が出土した。口縁の一部を打ち欠いた例や、胴部や底部に穿孔が見られる壷が数点出土しており、方形周溝墓の供献土器である可能性がある。弥生時代中期中葉の遺構である。

SD6004　最大幅約150cm、深さ40cmの溝状遺構である。東側は完結している。胴部穿孔の細頸壷が1点出土した。弥生時代中期中葉の遺構である。

SK101　直径約100cm、深さ30cmの円形の土坑内である。埋土から、鹿角、肩甲骨が出土した。弥生時代前期前半の遺構である。

SK5002　最大長150cm、深さ25cmの不定型の土坑である。埋土から、獣骨が出土した。弥生時代前期の遺構である。

SD5003　前回の調査時に掘削された遺構であるが、今回の調査で、弥生時代前期に埋没した溝状遺構の埋土の一部を掘削した状態であることが判明した。詳細は第7面で記述する。

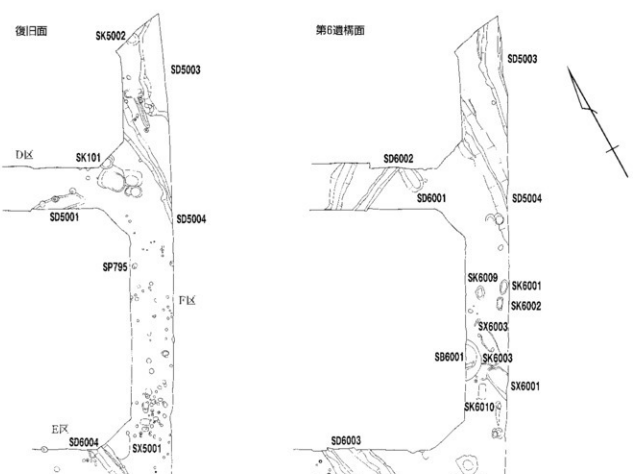


fig. 555　復旧・第6遺構面平面図

fig. 556　ＳＢ6001

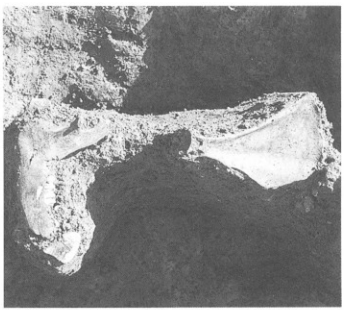


fig. 557　ＳＸ6002獣骨出土状況

・第６遺構面　弥生時代前期前半の遺構面である。竪穴住居１棟をはじめ溝、土坑等を検出した。うち、ＳＫ6001・6002、ＳＸ6002からは、多量の獣骨が出土した。

ＳＤ6002　幅約 130㎝、深さ 80㎝の溝状遺構である。上記の３例とは異なり、幅が狭く、排水等の別の用途が想定される。埋土から、土器に混じって獣骨が出土している。

ＳＤ6005　幅約 190㎝、深さ 50㎝の溝状遺構である。南端で西に屈曲する。ＳＤ6002と同様の堆積をしており、遺物からも差異は見られない。

ＳＫ6001　長辺 170㎝、短辺 70㎝、深さ 40㎝の不定形の土坑である。埋土より、イノシシ上顎骨等の獣骨が出土した。弥生時代前期前半の遺構である。

ＳＫ6002　長辺 120㎝、短辺 55㎝、深さ 40㎝の不定形の土坑である。埋土より多量の獣骨、土器が出土した。土器は細片が多く、個体として纏まるものは少ない。

ＳＫ6010　長辺 165㎝、短辺 70㎝、深さ 35㎝の隅丸方形の土坑である。床面隅に９箇所の杭穴が検出された。いずれも内傾しており、合掌状の屋根等の施設が想定されるが、詳細は不明である。埋土より、石製紡錘車、土製紡錘車、鹿角等が出土した。遺構の性格は不明である。

ＳＸ6002　直径約 270㎝、深さ約 70㎝の不整円形の土坑である。埋土より多量の獣骨や土器とともに、土製紡錘車が１点出土した。土器は細片が多く、個体として纏まるものは少ない。

ＳＢ6001　直径 440㎝以上、深さ 15㎝の円形の遺構である。直径約 140㎝の円形に１段落ち込む。炉等の施設が検出されず、遺構の性格は不明だが、柱穴が１基検出されており、住居である可能性が高い。

・第７遺構面　弥生時代前期中葉以前の遺構面である。

ＳＤ5003　幅約 210㎝以上、深さ 110㎝の溝状遺構である。断面形は、約45度の勾配で、Ｖ字状である。堆積状況より、前期古段階に掘削され、中期中葉段階以降に埋没している。堆積状況から、当遺構掘削時の排土は、西側に置かれたと考えられる。溝底から、イノシシ下顎骨が１体分出土した。下顎体部に穿孔されていることが特記される。

ＳＤ5004　幅約 240㎝、深さ 130㎝の溝状遺構である。断面形は、約45度の勾配でＶ字状である。堆積状況より、前期に掘削され、中期中葉段階まで機能していたと考えられる。ＳＤ5003

との継続期間の違いが注目される。

ＳＤ6003　幅約 440cm、深さ 110cmの溝状遺構である。2段階に掘削されており、ＳＤ5003、ＳＤ5004と形状が異なる。ＳＤ5004と同様、前期の古段階に掘削され、前期の中段階以降に埋没している。埋土から獣骨を含む多量の遺物が出土した。

ＳＤ7001　幅約 270cm、深さ 110cmの溝状遺構である。断面形は、約30度の勾配でＶ字状であるが、下部はほぼ垂直に落ち込む。ＳＤ5004と同様、前期の古段階に掘削され、前期の中葉段階以降に埋没している。埋土から、獣骨を含む多量の遺物が出土した。長辺 150cm、短辺 120cm、深さ 50cmの方形の土坑である。当遺構は人為的に埋められている。埋土より獣骨が1点出土した。

Ｄ区　西端部で 240cm以上の高低差のある落ち込みが検出された。微高地の短部にあたり、低湿地への変換点であると考えられる。この低湿地は、幅約 60ｍあり、第1次調査区の微高地まで広がる。弥生時代中期段階では、前期の微高地のレベルまで埋没している。前期の後半段階に、大規模な洪水等の土砂の流入があったと考えられる。

Ｂ区・Ｃ区　重機によるトレンチ調査と壁面精査を実施した。

Ｆ－Ｎ区　調査の結果、Ｆ－Ｓ区で検出されたＳＤ5004がＦ－Ｎ区に延びる事が判明した。弥生時代前期前半に掘削された当遺構は、弥生時代中期前半に再度掘削され、古墳時代中期に至るまで機能していたことが確認された。

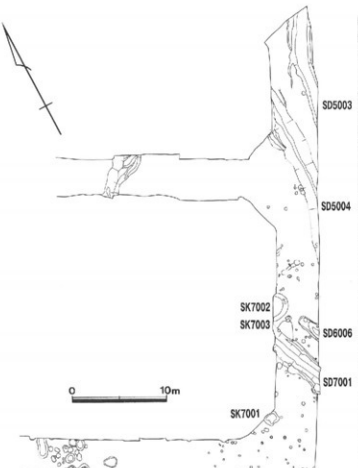


fig. 558　Ｆ区第７遺構面平面図

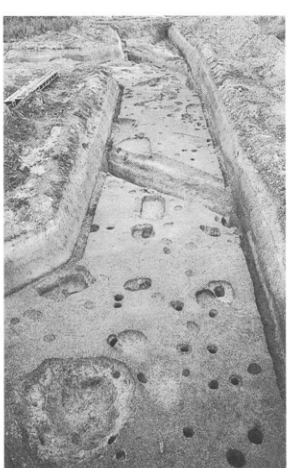


fig. 559　Ｆ区第７遺構面全景

3．ま と め

弥生時代前期前半の溝状遺構から検出された3体の人骨は、縄文人的な骨格を有し、畿内最古の弥生人骨である。3体ともに石鏃を伴って埋葬されていること、俯臥伸展葬という特殊な埋葬方法や、抜歯、石鏃のバリエーションなど、弥生時代の始まりを考える上での好資料である。

低湿地の東岸では、弥生時代前期の各時期における良好な一括資料が得られた。土器以外の遺物（獣骨・紡績具・農耕具）も多く検出され、当時の生活復元に良好な資料を得た。ＳＤ5003・ＳＤ5004・ＳＤ6003・ＳＤ7001は、人為的に掘削された規模の大きな溝状遺構で、断面形状からも、単なる区画溝ではなく、防御的な用途に使われたと考えられる。今回の調査では、これらの溝の全容は明らかにできなかったが、低湿地と平行して築かれた溝によって区画された集落の存在が想定される。しかし、弥生時代前期中葉段階で土地利用に大きな変化が見られ、ＳＤ5003・ＳＤ7001を埋め、生活域を拡大している。

弥生時代前期末から中期前半に大規模な洪水があり、微高地に挟まれた低湿地が埋没している。中期には、周溝墓や溝が検出されているが、生活域を示す遺構は存在しない。中期前半の溝の埋土より、玉類の未製品や加工具が出土しており、当遺跡における最古の玉造り関係の遺物である。

5世紀代の集落内から検出された多量の滑石製玉類は、当遺跡を特徴付けるものである。しかし、これまでに調査された生産域での出土状況とは違い、未製品が少ない事が挙げられる。また、廃棄住居から玉類が出土しており、廃棄時の祭祀を復元する上での好資料を得た。また、使用状況が復元可能な竈が検出でき、住居床面で検出された完形の遺物と共に、当時の生活復元に良好な資料を得ることができた。

古墳時代後半から奈良・平安時代の遺構は、隣接する吉田南遺跡との類似性が注目される。同時期の大型建物が存在し、豊富な遺物量と共に共通点が多い。

以上の様に、今回の調査では、弥生時代前期から近世に至る豊富な遺構、遺物が検出され、吉田南遺跡と共に、明石川下流域の拠点遺跡の様相を示す好資料を得た。

fig. 560
調査区遠景

69. 新方遺跡（しんぼう）　東方地区（とうほう）　第6次調査

1．はじめに

新方遺跡は、明石川と伊川の合流する地点の北東に位置し、新方遺跡の中にあってはその南端にあたる。南側100mの地点には上池遺跡が位置している。

新方遺跡東方地区のこれまでの調査は、今回の調査地のすぐ北側で昭和59年度より実施された玉津鳥羽線築造に関連する3次にわたる調査がある。また、調査区の東側では、平成8年度に共同住宅の建設に伴い、第5次調査が実施されている。

これまでの玉津鳥羽線関連の調査では、北から南に流れ、途中で大きく2つにわかれる最大幅15m、深さ1.2mの弥生時代前期から中期を主体とする遺物を多量に含む河道が検出されている。また第5次調査では、河道の他、弥生時代後期終末の遺構・遺物が多数出土しており、集落の一部を確認したと思われる。

今回の調査地は、この第3次調査地の南に接する地点であり、調査された弥生時代の河道の西側に向かう部分の南側が出土することが予測されていた。

fig. 561
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

層　序

調査地は水田に盛土をした状態でであったため市街地の中での調査のような撹乱もなく、層序に大きな乱れも認められなかった。層序としては、第1層（T. P. 7.3m）が水田耕土、第2層（T. P. 7.1m）が水田床土、第3層（T. P. 6.9m）が中近世段階の耕作土、第4層（T. P. 6.9m）が遺物包含層（中世の包含層）となり、遺構検出面（T. P. 6.5m）へ至る。ただし、第4層は地形が北東から南西へ緩やかに傾斜していることや、部分的な削平をうけており確認できない部分（主に調査地北東側）もあった。

検出遺構

今回の調査において、ピットや土坑・河道他を検出した。

ＳＫ01

調査区の中央で検出された長さ40cm、深さ25cmの土坑である。土坑の壁面には、炭が厚さ2cm程堆積していた。遺物は細片であるが、弥生時代中期と考えられる。

ＳＫ02

調査区中央北端にて検出された長さ72cm、幅50cm、深さ22cmの土坑である。土坑の壁

面には、炭が厚さ2㎝程堆積していた。弥生時代中期と考えられる。

河道　第3次調査で検出された河道2につながる河道を検出した。

河道1では、奈良時代に最終堆積とされているが、河道2における最終堆積層には13世紀代の須恵器が確認されており、後世に掘りなおされた可能性が残るものの、河道2の最終堆積の時期は13世紀代とみられる。13世紀代の堆積層の下では、おおよそ3層に分類でき、奈良時代の堆積層、弥生時代終末期の堆積層に分かれる。ごく一部でその下層を検出しており、この層が弥生中期の堆積層であると考えられる。

3．ま と め

今回の調査では、第3次調査に続く河道を検出した他、弥生時代の土坑を確認した。河道2の西側に弥生時代中期の遺構が存在していたのは確かである。この土坑は、中世のピット等と同一面での検出であるため、かなりの削平を受けているものとみられるが、壁面に炭の堆積が認められるもので、炉であった可能性がある。とすれば、削平された住居跡である可能性も考えられ、しいては、河道2の西に弥生時代中期の集落の存在を示すこととなりうる。しかし、明石川流域における拠点集落の一つとして新方遺跡を考えるならば、これまでの成果どおり、中期段階には、集落の縁辺にあたると考えるほうが妥当とみられる。第5次調査で検出された住居跡等は、集落の分散の状況下での存在と考えたほうがよいと思われる。なお、新方遺跡の集落の一時的な分散の状況下での位置づけにおいては、伊川流域の動向を含めて理解しておく必要もあろう。

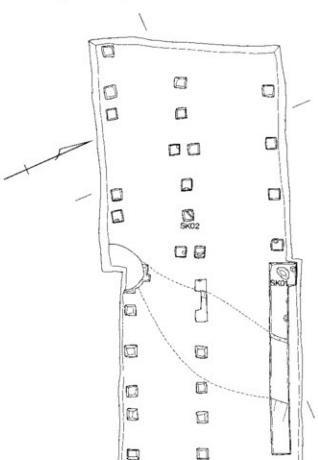


fig. 562　調査区平面図

70. 新方遺跡（しんぼう）　平松地区（ひらまつ）　第3次調査

1．はじめに

新方遺跡は、明石川下流域に位置しており、明石川・伊川をはじめとする、大小の河川によって堆積した沖積地上に立地している。

当遺跡は、山陽新幹線敷設に伴う分布調査によって、その存在が確認された。

今回の調査区は、平松地区における第3次調査に相当する。

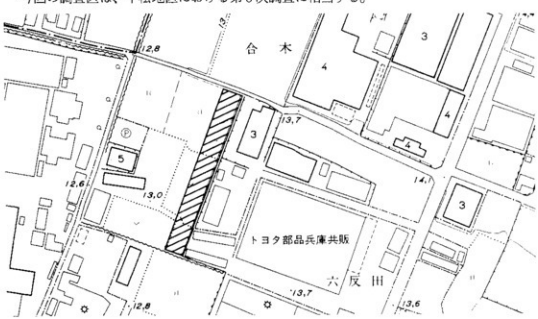


fig. 563
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

調査に際して工程等の都合から、調査区を南から順にⅠ区・Ⅱ区として設定し、Ⅰ区から順次調査を行った。

Ⅰ　区

Ⅰ区では、近・現代耕土下層で遺構面を3面検出した。第1遺構面は中世の遺物を含む鎌倉時代～室町時代頃、第2遺構面は平安時代の水田面、第3遺構面は弥生時代Ⅴ期を主体とした時期のものと考えられる。

第1遺構面

表土下5面にわたる近・現代耕土およびその床土のさらに下層、地表面より1m程度下がった地点で第1遺構面を形成する層を調査区全体で確認した。第1遺構面で確認した遺構は、土坑1基、溝1条、ピット4箇所、および畦畔状隆起1条である。

ピット

ＳＤ106の周辺に径20cm、深さ約20cm程度のピットを4箇所検出した。配置に規則性はなく、性格は不明である。

畦畔状隆起

調査区北半に南北に走る畦畔状隆起を確認している。周辺に鋤溝様の窪みが多数確認されていることからも、田圃にともなう畦畔の可能性が高い。北側のⅡ区でも続いて検出されており詳細はまとめて後述する。

河　道

調査区のほぼ中央を北東から南西へ対角線状に横切る形で幅4.5m程度の河道が確認された。この河道は、古い時期に形成されたものの最終堆積部分であると考えられる。上記の畦畔がこの河道を水源とする田圃に伴う施設である可能性が考えられる。

小　結

Ⅰ区で検出した第1遺構面は、田圃、あるいは湿地性土壌と考えられる。同時期の居住域はⅡ区側に存在しており、考察はあわせて後述する。

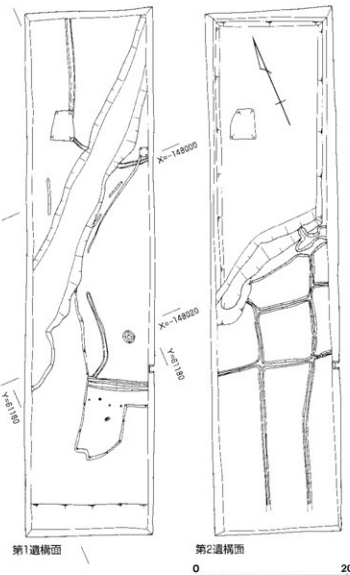


fig. 564
I 区第１・２遺構面平面図

第２遺構面　第１遺構面を除去し、直下の室町時代の土器を含む耕土と床土の層をさらに除去した面で確認した。調査区の北⅓は旧河道である。南側⅔は、畦畔をともなう水田面である。

水　田　水田はほぼ調査区と平行に走る畦畔をともなう。その形状は１ブロックが短辺約６ｍ×長辺約 22m（132㎡）の極端に細長い長方形である。畦畔の方向は条里の方向を示すと考えられるが、東へ約30度振るかたちである。水田は北側の河岸付近では地形上の制約から１ブロックが８ｍ×８ｍの小区画となっており、河の取りつき部分で、河にむかって下がる水口（排水口）も確認された。水田上面には旧河道からフローした粗砂層が薄く堆積しており、河川の氾濫によって水田が短時間に埋没したと考えられるが、水田を覆う洪水砂には調査時の所見では平安時代の土器が含まれていることから、水田の存続した時期は、この頃である可能性が高い。

fig. 565
Ⅰ区第２遺構面全景

河　道　調査区の北½は旧河道である。第１遺構面を除去し、直下の室町時代の土器を含む耕土と床土の層をさらに除去した面で、調査区の北½ではラミナを形成する極細砂～砂質シルト層と粗砂層の繰り返しが厚さ２ｍ以上堆積しているのを確認した。地表面より３ｍの地点まで掘削したが、河底は確認できなかった。埋土には、上層で中世の土器が、中・下層で中世、平安時代および弥生時代後期の土器が混在していた。弥生時代の土器については後世の流入の可能性が高い。

小　結　平安時代の水田と水源となる旧河道を確認した。水田の形状は、極端に細長く特徴的である。この時期の条里制が確認された例は、市内でも初めてである。水田は河の氾濫によって埋没している。この河の最盛期は当該時期で、完全に埋没したのが第１遺構面の時期以降と考えられるが、正確な消長は把握できない。

第３遺構面　水田層の下層では、弥生時代Ⅴ期を主体としてわずかに古墳時代の土器を含む遺物包含層と、さらにその下層で遺構面が確認された。この面で確認された遺構は、ピット28箇所と、溝２条である。調査区の北½は上述の河道である。

ＳＤ301　調査区の南側で確認した。幅約20㎝、深さは約５㎝と浅い。調査区の短辺、東西方向に平行に走る。底面に不規則な配列で径５㎝程度のピットを有するが、機能は不明である。遺構密度は、この溝を境に以南程多く、以北ほど少なく、河岸付近では全く遺構は存在しない。あるいは何らかの地区界の機能をもつ可能性も考えられる。

ピット　調査区の南半で計28箇所ピットを確認した。建物等は確認できなかった。

第３遺構面以下層　第３遺構面以下の層については調査区南½を、南北に幅１ｍで深さ約1.5ｍほど掘り下げる断ち割り調査を実施したが湿地性の堆積状況の可能性が高く、遺物・遺構面は確認できなかった。

小　結　遺構埋土からは、弥生時代Ⅴ期と考えられる土器片が出土しており、当該時期の遺構と考えられる。遺構の詳細な性格は不明であるが、当調査区の北側近接地で、同時期の遺構が確認されており、それに継続するものと考えられる。

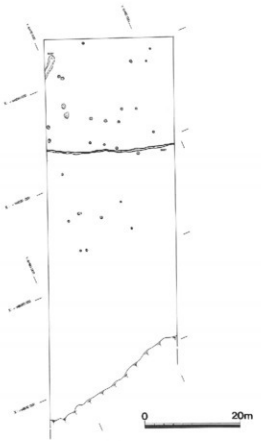


fig. 566　Ⅰ区第３遺構面平面図

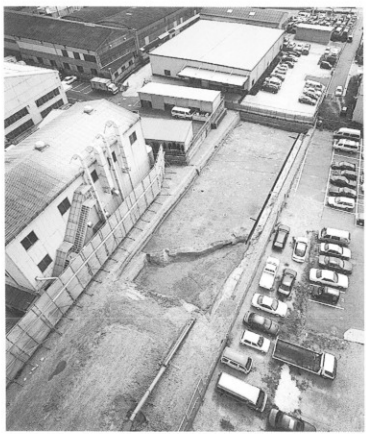


fig. 567　Ⅰ区第３遺構面全景

Ⅱ　区　Ⅰ区の北側に続く調査区である。遺構面は４面確認された。Ⅰ区との関係はⅠ区第１遺構面とⅡ区第１遺構面、Ⅰ区第２遺構面とⅡ区第４遺構面がそれぞれ対応する。Ⅱ区の第２・３遺構面はⅠ区の第１・２遺構面を形成する堆積層の中間層である淡青褐色粘土層に対応すると考えられるが、南方のⅠ区では明確な遺構は確認されなかった。

第１遺構面　暗灰色粘性砂質土上面で検出された遺構面である。暗灰色粘性砂質土は調査区の中程でなくなり、以南は黄灰色極細砂層、淡灰色砂質シルト層面が遺構面となる。

掘立柱建物３棟、溝６条、土坑３基、落ち込み１基、畦畔、柱穴約80基が検出された。

ＳＢ01　東西４間（9.6m）×南北４間（8.5m）以上の総柱の建物である。柱穴の掘形は円形で、径約30cm、深さは約30cmである。出土遺物はいずれも細片で明確な時期は不明であるが、包含層の状況などから11世紀代の建物と考えられる。

ＳＢ02　東西２間（3.7m）×南北１間（2.0m）の建物である。柱穴の掘形は円形もしくは方形で径（一辺）約25～30cm、深さは約20cmである。Ｐit 203から土師器の皿と砥石状の石製品が出土している。ＳＢ01同様、11世紀代の建物と考えられる。

ＳＢ03　東西３間（6.8m）×南北２間（4.0m）の総柱の建物である。柱穴の掘形は円形で、径約30～50cm、深さは約40～50cmである。検出された12基の柱穴の内、９基には礎石が遺存しており、人頭大で上面を平らに加工した石が据えられている。またＰit 311では20cm角に加工した木材を３段に重ねた状況が確認され、Ｐit 312では拳大の石を円形に据えた後、これも20cm角に加工した木材を中心に置き、その上に長辺30cmほどの偏平な加工木を据えて礎板にしている。いずれも柱穴底部より押し込まれた状況で検出されており、上

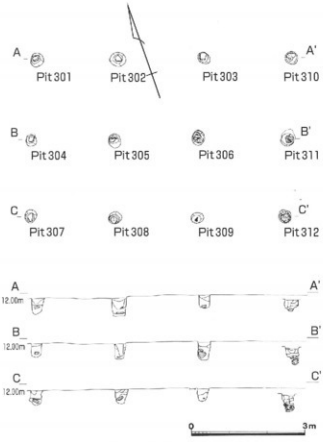


fig. 568　SB03平面図・断面図

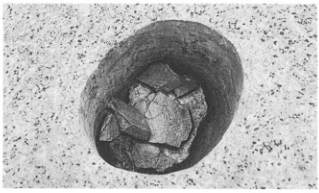


fig. 569　Pit 306

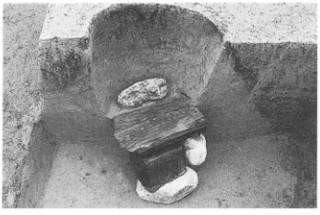


fig. 570　Pit 312

部からの加重をかなり受けている。断面観察の結果などからも軟弱地盤に対処するように施されたものと推測される。Pit 306から瓦が出土した他はまとまった遺物が少なく、建物の時期は周辺の状況などから11世紀代の建物と考えられる。

SK01　切り合い関係にある2基の柱穴の可能性があるが土坑として処理した。長径80cm、短径約50cmの楕円形の土坑で、最深部の深さは25cmを測る。中から須恵器・土師器の他、鉄器が1点出土している。西側の浅い部分からは礫により破砕された須恵器椀が出土している。12世紀後半の遺構である。

SX01　調査区の南端で確認された落ち込みである。この落ち込みは包含層上層の旧耕土層から切り込むものであるが、耕土層の明確な時期は判明していない。下辺幅60～90cm、上辺幅30～40cmの畦畔が検出された。畦畔は西側で十字形に交差し、北側は落ち込み上部に、東側は島状の隆まり（大畦畔？）にそれぞれつながる。床土面で土坑2基、溝2条を検出したが、時期が判明する遺物を伴っていない。落ち込みに堆積する水田耕土と考えられる灰褐色粘質土層からは平安時代～室町時代までの遺物が出土している。以南はⅠ区の第1遺構面へと続き、湿地状の不安定な地形を呈する。Ⅰ区では畦畔は明確に確認されなかったが、SD102などは畦下に伴う溝である可能性が高い。

SD23　幅30cm、深さ3～5cmの溝である。土器などは出土していないが、溝全体から炭化材が出土しており、埋土中にも細かい炭が混じる。

地震痕跡　暗灰色粘性砂質土上面精査時に地震に伴う噴砂を多数検出した。幅1cm前後、太いもので幅3cmほどであるが、砂の噴き出しが40cm四方で平面的に広がる部分も確認された。

1条あたりの噴砂の検出長は概して長く、細かい断続を繰り返して10mに及ぶものもある。南北の方向性が認めら、噴砂間は毛細血管のような細かい噴砂が相互に絡み合っている。断面観察の結果、上部は現代の水田耕土層下面にまで及んでおり、その下部の耕土層の年代が明らかでないが、1596年の伏見地震に伴う噴砂の可能性が高い。液状化を起こした層は下層の自然河道の堆積層で、砂礫の上昇は約2mに達する。調査区南側で断ち割りを行ったところ、砂脈に挟まれた部分の土層で食い違いが確認された。また、径8cmほどの礫の上昇も認められ、震度7クラスの揺れがあったものと考えられる。

小　結　建物を構成する柱穴の出土遺物が少ないため、各建物の詳細な時期が不明であるが概ね11世紀代のものと考えられる。南側は鎌倉～室町時代の水田に伴う落ち込みにより切られているが、平安時代後期においても安定しない地盤であったと考えられ、これは後述する下層の第2遺構面の状況からも推測される。

fig. 571
II区第1・2遺構面平面図

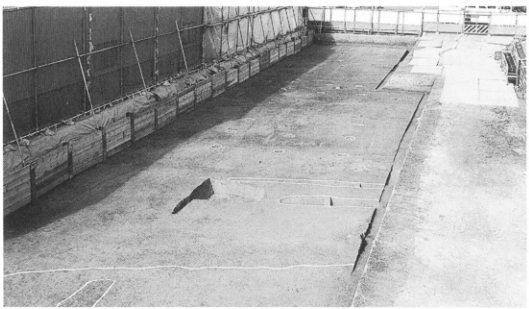


fig. 572
Ⅱ区第1遺構面全景

第2遺構面　黄灰色極細砂層面で検出された遺構面である。掘立柱建物3棟、溝18条、土坑8基、落ち込み4基、柱穴約230基が検出された。

SB04　東西1間（2.0m）×南北2間（4.0m）の建物である。柱穴の掘形は円形で、径30～40cm、深さは約20cmである。出土遺物が小片のため建物の詳細な時期は不明である。

SB05　東西3間（3.0m）×南北3間（6.0m）の総柱の建物である。柱穴は円形の掘形で、径30～40cm、深さは20～40cmである。Pit 502・507には拳大よりやや大きな石が据えられている。Pit 501から土師器皿、須恵器片が出土しており、建物の時期は11世紀代と考えられる。

SB06　東西1間以上（1.8m）×南北4間以上（6.4m）の総柱の建物である。柱穴の掘形は円形で、Pit 602の1基のみ径60cm、深さ70cmと、他の柱穴が径30cm前後、深さ20cmであるのと比較して規模が大きい。Pit 506・510などから出土した遺物から、建物の時期は10世紀前半と考えられる。

fig. 573　SB05

fig. 574　SB06

土　坑
ＳＫ02　一辺約2.5ｍの方形の土坑である。深さは約20㎝で埋土には炭や焼土が混じる。須恵器、土師器が出土しており、９世紀後半の遺構と考えられる。

ＳＤ04　幅１ｍ～３ｍ、深さ20㎝前後の溝で、南流したのち西側へと曲がる。出土遺物は９世紀代のもので、須恵器・土師器が多量に出土した他、瓦、鉄滓、用途不明の石製品、銅銭（承和昌宝〔835年初鋳〕）なども出土している。下層の自然河道の堆積上層で、緩やかに

ＳＸ04
（埋甕）　埋没する過程で土器が投棄されるなどしたものと推測される。溝底からは非在地系の灰白色の稠密な胎土をした甕が出土した。おそらく甕を直接押し込んで据えたものと考えられる。甕は器高47㎝を測り、底部近くの側面に穿孔が施され、底には３㎝ほどの石を敷き詰めている。底から¼あたりに暗灰色の土が薄く堆積しており、有機質の、蓋などを被せていたものが落下した可能性がある。この層を境に上部には小礫が多く混じり、河道あるいは溝の土が流れ込んだものと思われる。甕の用途や埋納の意図については現段階では不明であるが、周辺には先述の銅銭や土師器皿、炭や焼土の分布が認められることから何らかの祭祀に伴うことも考えられる。

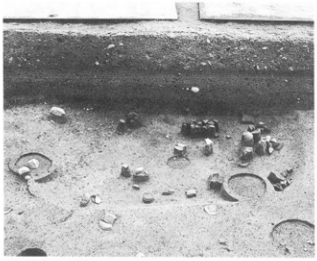


fig. 575　ＳＫ02

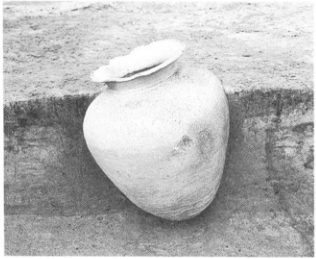


fig. 576　ＳＸ04

落ち込み
ＳＸ02　調査区の南側はＳＤ03を境に南へ緩やかに落ち込む。ＳＸ02は湿地状の落ち込みで、畦畔などは確認されなかったが、上層のＳＸ01同様不安定な土壌が広がっていた状況が確認された。平安時代後期の須恵器、土師器が比較的まとまって出土している。

ＳＸ03　長辺約2.5ｍ、短辺約1.8ｍ、深さ20㎝のやや歪な長方形を呈する落ち込みである。少量の土器と砥石２点、鉄器１点が出土している。

ＳＸ05　長軸約６ｍ、短軸約2.5ｍの長楕円形の落ち込みで、最深部の深さは約40㎝である。完形の須恵器・土師器が多数出土した他、瓦や製塩土器、鉄滓（炉壁？）も出土している。埋土の状況から一括投棄と考えられるが、遺物の時期は９世紀代全般にわたり、やや時間的に幅がある。

鍛冶関連遺構　調査区北で鍛冶工房と考えられる一連の遺構群を検出した。

ＳＸ06　一辺約2.2ｍ、深さ約10㎝を測る方形の遺構である。埋土中には焼土や炭が混じり、床面や掘形の上面には鉄粉かと思われる黄色の微細な粒子が広がり、全体に硬化している。

ＳＸ07　床面から鍛冶炉（ＳＸ07）を検出した。ＳＸ07の平面形は長径35㎝、短径30㎝の楕円形で、

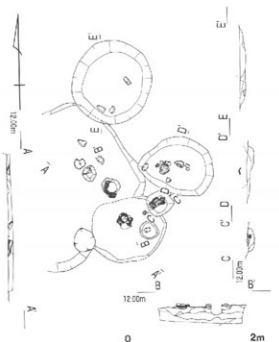


fig. 577　鍛冶関連遺構平面図・断面図

fig. 578　鍛冶関連遺構

ＳＸ08　断面は、中央がやや窪んだ浅い皿状を呈する。床面から高さ５㎝ほどの硬化部分が遺存しており、外側は酸化、内側は還元により変色していた。底部では熱変化は認められない。遺構内からは須恵器、土師器が出土、被熱により変色した石も出土している。さらにＳＸ06の南側には長径1.2ｍ、短径１ｍの円形の土坑があり、同じく鍛冶炉と考えられるＳＸ08が検出された。断面観察からＳＸ06を切り込む土坑内に設けられた後出の鍛冶炉と考えられる。平面形は円形で径25㎝、周囲に還元した硬化面をもち、深さ５㎝ほど窪んだ炉底には厚さ３㎝の炭層が堆積、その下部には熱変化が認められる。その他ＳＫ10からは鉄滓と羽口、Ｐit 93からも鉄滓が出土しており、埋土に炭の粒子を多く含むＳＫ07も鍛冶工房に伴う一連の遺構と考えられる。各遺構出土遺物の時期であるが、ＳＸ06から出土した須恵器は９世紀前半、ＳＫ10から出土した須恵器は11世紀代のものである。その他の遺構からはいずれも細片の遺物しか出土しておらず明らかではないが、一連の施設とすればかなりの時間幅をもつ結果となり、鍛冶炉の操業期間などの問題が残る。なお鍛冶工房とされるＳＸ06周辺の作業スペースの覆屋として、その位置から第１遺構面で検出したＳＢ01が該当するのではないかと考えられるが、ＳＢ01検出時においては積極的に鍛冶工房に伴う建物であると判断できる痕跡は確認できなかった。なお、ＳＸ07・08については切り取り作業を行い、保存を図った。

小　結　第２遺構面においても第１遺構面同様、平安時代の建物などが検出された。第１遺構面と比較して検出遺構の密度が高いようだが、検出の過程で確認できなかった第１遺構面から掘り込まれた遺構が下面で検出された部分も多いようである。特筆される遺構として鍛冶炉などの鍛冶関係の遺構が挙げられ、鉄滓や鉄製品、砥石など鉄器製作に関係する遺物の出土も注目される。また北側で検出された溝の一部は下層の自然河道の埋土と考えられる。前半の遺物を含む９世紀代の遺物が出土しており、周辺に９世紀前半の集落したことを窺わせる。

fig. 579　Ⅱ区西半部第２遺構面全景

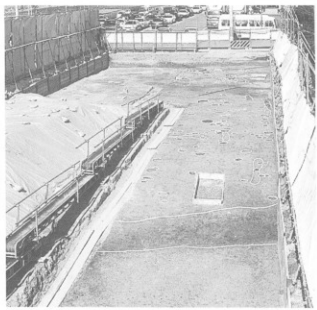


fig. 580　Ⅱ区東半部第２遺構面全景

第３遺構面　第２遺構面を形成する黄灰色極細砂層下で溝を２本確認した。溝内からは９世紀前半の須恵器、土師器、瓦が出土、溜まり状の部分では細片となった製塩土器の投棄が確認された他、蛸壺の出土をみた。

第４遺構面　Ⅰ区の第２遺構面で検出された自然河道の河道底を確認した。第２遺構面を形成する黄灰色極細砂層下約1.5ｍで青灰色シルト層が検出された。砂層、礫層が交互に堆積しており、複数の流れの単位が認められる。磨滅した弥生時代中～後期の土器が混入するが、大半は平安時代のものである。Ⅱ区では河道埋没面で平安時代前半の遺構が検出されることから平安時代でも早い段階の自然河道と考えられる。Ⅰ区第２遺構面検出の水田も水口の存在などから同時期に属するものといえよう。なお、Ⅱ区内では南に対応する河道の肩は検出できなかったが、河道底部は徐々に上がってきており、肩部は近いと思われる。

３．ま　と　め

今回の調査では平安時代～中世及び弥生時代後期の遺構・遺物が確認された。特にⅡ区では平安時代の遺構・遺物が多数検出され、調査区南側は湿地状の不安定な土壌が広がるが、北側には平安時代から中世にかけての大規模な集落が展開することが明らかになった。今池尻遺跡、白水遺跡など同時期の遺跡が北方の段丘面から沖積地に立地しており、関連が注目される。掘立柱建物をはじめとする多くの遺構が検出された中で、鍛冶関連遺構が検出されたことが特筆されるが、平成８年度の白水遺跡・延命寺地区の調査では11世紀と思われる梵鐘鋳造遺構が確認されており、寺院に供された梵鐘という特殊な性格のものであろうが、付近で鉄、銅製品の製作が行われていたことが確実となり、集落の様相の一端を示すものといえる。

またⅡ区では平安時代の河道により消失していたが、Ⅰ区の南部分では弥生時代後期の柱穴、溝が検出され、弥生時代後期の集落の広がりを考える上で必要なデータが得られた。

今回の調査地は位置的に新方遺跡、今池尻遺跡、白水遺跡の接点といえる場所にあたり、弥生時代におけるそれぞれの遺跡の範囲や存続時期を考える上で重要である。

71. 頭高山（ずこうさん）遺跡　第7次調査

1．はじめに

当遺跡は、昭和53年に、西神ニュータウン開発に伴う分布調査において発見された遺跡である。昭和54、55年度には、「大山」山頂を中心とした試掘調査が実施され、大規模な弥生時代の高地性集落の存在が明らかにされた。あわせて、山中の一石五輪塔の存在、さらに、試掘調査において検出された瓦溜まりや礎石などから、中世の瓦葺き建物の存在も想定された。

また昭和57、58年度には、道路建設に伴い遺跡南東部7000㎡について、発掘調査が実施され、竪穴住居址、段状遺構、土器棺墓などが、検出され、磨製石剣をはじめとする石器類や、中期の弥生土器が多量に出土して、遺跡の重要性が再確認された。

今回の調査は、平成7年度より実施している宅地造成工事に伴う発掘調査事業で今年度の調査の対象面積は15,000㎡である。

fig. 581
調査地位置図
1：4,000

2．調査の概要

調査に際して便宜上、調査区を丘陵の尾根ごとに設定し7～11区とした。7～8区では、昨年度、第1遺構面の調査が終了しており、中世寺院跡などの遺構が確認されている。

第1遺構面

今年度の調査では、隣接した場所で3基の土坑を検出し、先年度と合わせて1箇所にまとまって4基の、墓と推定される遺構を確認した。

ST02　長径1.5m、短径1.3m、深さ現在で約70cmの楕円形の土坑に胴径約80cmの備前焼の大瓶を埋納している。土坑上部は、削平を受けたため瓶の上部も残存していない。瓶の内部には一抱えもある石が転落しており、その性格は不明だが、あるいは蓋の重しに使用していた可能性も考えられる。なお一石五輪塔等の上部施設は確認できなかった。

ST03　長辺1m、短辺90cm、深さ現存で約90cmの隅丸方形の土坑である。上部施設および棺は確認できなかったが、土坑底面近くで銅銭5枚と、鉄釘1本が出土し、土層断面からも

棺内と棺外の埋土の違いが認められるので、棺を使用しており、それも木製の棺であろうと推定される。

ＳＴ04　径約1.3m、深さ現存で約50cmの不整円形の土坑である。ＳＴ03同様上部施設と棺は確認できず、出土遺構もないため、詳細な性格は不明である。

これらの遺構の正確な時期、性格については不明である。備前焼の大瓶、銅銭からある程度の時期の特定は可能であるが、決定的なものではない。また、各々の遺構の構築順序についても不明である。

第２遺構面　第２遺構面を形成する暗灰褐色土層は、７区のごく限られた範囲に堆積する。第１遺構面である中世寺院の基壇盛土を除去した部分で確認された。

ＳＫ36　ＳＫ36は長辺約３ｍ、短辺約1.5ｍの南北に長い長方形を呈し、北側短辺中央部分に一段深いピットを有する。深さは約10～20cmと比較的浅い。埋土は黒色の炭層で、平面全体にも炭化材が厚く堆積していた。また壁および床面は赤変しており、土坑内で火を焚いたと考えられる。

ＳＫ39　ＳＫ39は長辺約３ｍ、短辺約１ｍの南北に長い長方形で、北側にピットを有し、埋土の

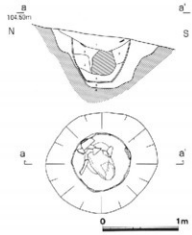


fig. 582　ＳＴ02平面図・断面図

fig. 583　ＳＴ02

fig. 584　ＳＫ36・39・40平面図

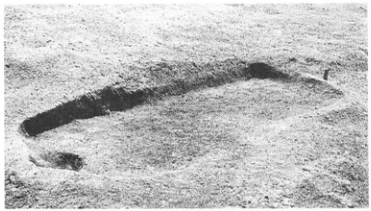


fig. 585　ＳＫ36

特徴、赤変している点などＳＫ36と同様である。深さは約10～20cmである。

ＳＫ40　ＳＫ40も他の２基と類似する特徴を持つ。一見平面構造が異なるが、基本的には同じと見てよい。長辺約４ｍ、短辺約1.7ｍの南北に長い長方形で、深さは20cm程度である。北側短辺に灰を掻きだしたのか、窪みが付随する。

蔵骨器　蔵骨器は２号基壇と呼んだ中世遺構の下層で出土した。上部施設は確認できず、基壇造成時に破壊されたものと推定される。墓壙は明確には認められなかったが、おそらく蔵骨器より少し大きい程度のものであろう。蔵骨器は、須恵器で相野窯跡群のⅣ・Ⅴ期に編年

fig. 586　調査区平面図

されるもので、10世紀の第3四半期に該当する。壺のなかには火葬骨の他に鉄製の火打金が納められていた。火打金は平面山形のもので、この時期のものは住居跡や経塚などからの出土例はあるが、蔵骨期に副葬された例は見当たらない。

小　結　第2遺構面で確認した3基の土坑のうち、SK39、SK40については、放射性炭素年代測定を行った。その結果SK39に関しては、9世紀前半、あるいは9世紀後半～11世紀初頭の2種、SK40については11世紀初頭、12世紀中頃、12世紀後半から13世紀の3種の年代幅を示した。これは遺構そのものの年代を知る上で、また上層の寺院遺構の年代を考える上で重要な資料となり得るものである。

第3遺構面　平成7年度から、調査区のほぼ全域で確認している弥生時代遺構面である。7～11区で竪穴住居5棟、段状遺構11箇所、土坑3基、ほか用途不明の遺構などを確認した。

SB12　残存径約5mで、本来は円形と推測されるが、西半、北半が流失しているため詳細は不明である。中央土坑、周壁溝の一部を確認している。

SB13　径約8mのほぼ円形であるが、西端が、中世の整地によって削られて失われている。床面で多数のピットを検出しており、中央土坑も確認されている。

SB14　周壁溝の一部とピット、中央土坑を確認しているが、大半が流失しており詳細は不明である。復元すれば4～5m程度の規模になると考えられる。住居址でない可能性もある。

SB15　残存径約7m、周壁溝とピットを検出しているが、西側%が流失しているため詳細は不

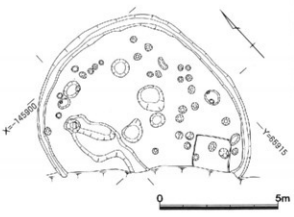


fig. 587　SB13平面図

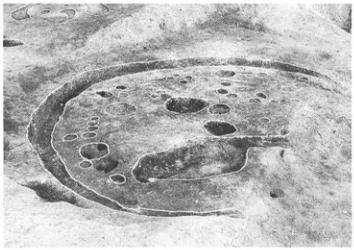


fig. 588　SB13

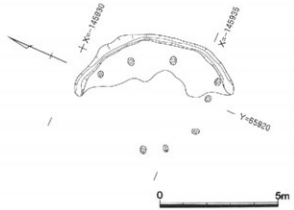


fig. 589　SB15平面図

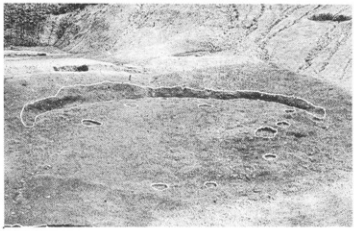


fig. 590　SB15

明である。床面で壺（内部に炭化物の充満したもの）の半完形品が出土した。

ＳＢ16　周壁溝の一部とピットを2箇所確認したが、ＳＸ18と呼んだ遺構と切り合うように検出されているため、あるいは住居址でない可能性もある。

段状遺構08　標高107ｍ付近の、南向きの斜面に位置する。斜面を削り幅2～3ｍ長さ10ｍ程度の平坦地を築いている。平面上にはピット溝などは確認できなかった。

段状遺構10　段状遺構08の位置する斜面のすぐ下位部分、標高102ｍ付近で確認された。幅2～4ｍ長さ20ｍ程度の平坦地である。平面では楕円形のピット1基と長軸方向に平行な溝が3条検出された。3条の溝は遺構の西半部分のみ認められる短いものである。他の段状遺構と異なり階段状に2段の段を有する平面形は、あるいは住居址と段状遺構の複合したものである可能性も考えられるが、検出された平面から2段構造の段状遺構なのか住居址と段状遺構のセットなのか限定することは不可能である。

段状遺構11　標高107ｍ付近、丘陵の最南端の尾根上に位置する。幅約3ｍ、長さ約20ｍの、断面Ｌ字状の平坦面だが、遺構の残存状況が悪く平面上ではピット等の施設は確認できなかった。

段状遺構12　標高110ｍと、高い位置にある段状遺構である。残存状況が悪く平面上で確認できたも

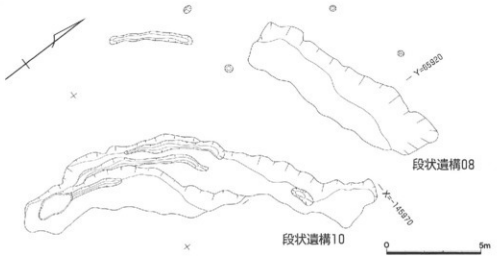


fig. 591
段状遺構08・10平面図

fig. 592　段状遺構08・10

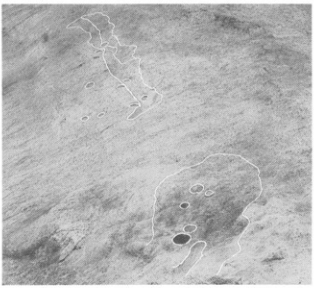


fig. 593　段状遺構14

のは、長径約１ｍ、短径約60㎝の土坑１基のみである。北端部分は、後世の寺院造営のさい削平されて、失われている。

段状遺構13　段状遺構12の西隣、標高102ｍ付近に位置する。比較的傾斜の緩い平坦な場所だが、遺構の残存状況が悪く確認できたものは、長さ７ｍ程度の溝とピット３基である。竪穴住居の可能性も残されるが、確定できない。

段状遺構14　段状遺構11の位置するのと同じ尾根に位置する。段状遺構11より北側の、尾根のつけ根部分に位置する。標高は、100ｍ付近である。遺構のほぼ中央が流失しているが、全長は20ｍ、幅は３ｍ程度であったと考えられる。平面状で溝、ピット、土坑などを確認しているが、相互の関係、機能等は不明である。西半分は、残りが悪く、溝、ピットのみを確認し正確な外形は把握できなかった。あるいは、住居址と段状遺構のセットの可能性も残される。

段状遺構15　ＳＢ15の北に隣接する。ここも後世の寺院造営のさい整地されており、残存状況は著しく悪い。確認できたものは長さ６ｍ程度の溝と、ピット２基のみで、正確な外形は把握できなかった。形状から、段状遺構と推定されるものである。

段状遺構16　ＳＢ15の東隣で確認した。残存状況が悪く外形は不明だが、長さ６ｍ程度の溝と、ピットを数基確認した。この遺構の周辺にはＳＸ05、06と呼ぶ馬蹄形の用途不明の遺構が検出されている。標高は100ｍ付近となる。

段状遺構17　ＳＢ12の直近の西隣に位置する。この遺構周辺は西に下る谷部分にあたる地形で、土層の流失が著しいうえに、後世の寺院造営のさい整地されており、弥生時代遺構の残存状況は著しく悪い。段状遺構17も確認できたものは長さ７～８ｍ程度の溝と土坑１基のみである。段状遺構ではない可能性も残る。

段状遺構18　段状遺構11のすぐ下位で検出した。標高は96ｍ付近である。全長約24ｍ、幅は３ｍ程度だが、南端部分だけが二段になり、約８ｍに幅が広がる。住居址と段状遺構のセットの可能性もあるが、残存状況が悪く、確定できない。

段状遺構19　ＳＢ10の東隣で確認した。寺院造営のさいの整地で削平されており残存状況が悪く、長さ６ｍ程度の溝とピット３基を確認したにすぎないが、おそらくＳＢ10に付随する段状遺構であろうと考えられる。

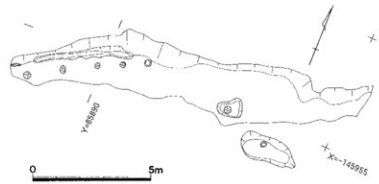


fig. 594　段状遺構19平面図

段状遺構20　段状遺構12の北側に、少し離れて位置する。あるいは段状遺構12の続きの可能性もあるが、標高112mと、段状遺構12よりわずかに高く位置する。長さ約4m、幅2mと小振りだが残りが悪く流失している可能性もある。平面状ではピット等は確認できなかった。

段状遺構21　ＳＢ10の北隣に位置する。長さ12m、幅2～3m程度の規模で、平面東端で溝とピットを検出した。平面西側に2箇所土坑を検出したが、あるいはこれも住居址と段状遺構のセットの可能性がある。

土坑　弥生時代のものと考え得る土坑は2基確認している。ＳＫ35は1m四方の方形を呈するが、斜面に築かれており、西半は流失した可能性もある。ＳＫ38は長径約1m、短径80cm程度の楕円形である。この2基は弥生土器を多く埋土内に含み、弥生時代遺構と同時期の可能性が高い。

ＳＸ04～06　用途不明の遺構を3箇所確認した。それぞれＳＸ04、05、06と仮称する。ＳＸ04はＳＫ29の南隣に位置する。長辺約4m、短辺約2mの不整方形である。周辺にピットと、遺構平面状に浅く短い溝を確認したが機能等不明である。

ＳＸ05、06については先述した段状遺構16周辺の馬蹄形の遺構である。深さは60～80cmと深くＳＸ06の径は3m程度である。ＳＸ05については、寺院造営のさいの削平で南半分が失われているが、ＳＸ06と類似する規模、形状であろうと推測する。

fig. 595　調査区遠景

出土遺物　弥生土器、中世の土器、瓦等、28ℓコンテナに約120箱出土している。その他石器47点中世の鉄製品多数が出土している。注目すべき遺物としては、段状遺構08より出土した「きのこ形土製品」、ＳＢ14付近の包含層から出土した絵画土器片があげられる。絵画土器片については細片のため詳細は現時点では不明である。「きのこ形土製品」は、所謂東北地方の縄文時代に多く出土する「きのこ形土製品」と形状の点で一線を画するものである。縄文時代の「きのこ形土製品」は椎茸を連想する「きのこ」を模しているが、当遺跡出土のものは強いて言うと松茸に似ているといえよう。竹管様の施紋が「かさ」部分になされており、「きのこ」以外のものを意図している可能性もある。現時点では類例を見いだせないため、形状から仮に「きのこ形土製品」と呼ぶことにするが、名称、機能とも今後検討すべき課題である。時期は、共存遺物から弥生時代中期と断定してさしつかえないと考える。

小　結　調査時の所見としては、きのこ形土製品、絵画土器、多くミニチュア土器を出土していること、石器としては伐採斧が主で、石鏃は「著しく多い」とは決して言えない数であることが特徴としてあげられる。これらの遺物については、統計的処理を行った上で他の近隣地域の高地性集落との比較を行うべきと考える。土器様式としては明石川流域の弥生時代Ⅳ期の典型と考えられる。遺構に関しても、残存状況が悪いものが多く明確な性格の把握できないものが多い。これも明石川流域の高地性集落のステレオタイプの範囲にとどまるものであろう。所謂「段状遺構」と呼称されるものについては、「掘立柱建物」と単一の機能に結び付けず、竪穴住居等の位置関係も考慮にいれ検討が必要であろう。形態分類を十分に行い、属性を整理すれば、機能性格の異なる複数の遺構に分類できる可能性がある。

3．ま と め

今年度の調査をもって、全ての調査対象地域の調査を終了した。調査の対象となった地区の総面積は、述べにして57,600㎡にのぼる。従来より知られていた弥生時代中期の高地性集落が、丘陵全体の広い範囲に存在していたことが確認された。このように高地性集落の全域を調査した例は少なく、当該地域のみならず、ひろく近畿の弥生時代の集落研究の資料として、今後注目されるものとなり得る。

また、新たに確認された中世山岳寺院は、当該地域の中世史の貴重な資料である。このような山岳寺院の全域を調査した例は、全国でも10例に満たない。

また、当遺跡より出土した「きのこ形土製品」は弥生時代のものとしては全国でも類例を見ない貴重なものである。

72. 城ケ谷遺跡　第3次調査

1．はじめに

城ケ谷遺跡は、櫨谷川中流域の左岸の丘陵上に立地する遺跡である。標高約100mの尾根頂上から標高約70mの丘陵斜面にかけて遺跡は広がっており、その総面積は約60,000㎡以上にもおよぶものと推定される。遺跡の最高所と、谷口川が櫨谷川と合流する付近の沖積地との比高差は約60mである。また、磨製石戈や小型仿製鏡が出土した弥生時代中期の大規模な高地性集落として知られる青谷遺跡とは、谷を隔てて指呼の間に位置している。

今年度も、平成7・8年度に引き続き、平成6年度の試掘調査の成果に基づき、西神住宅第2団地の造成に先立って、約25,000㎡を対象に埋蔵文化財の発掘調査を実施した。

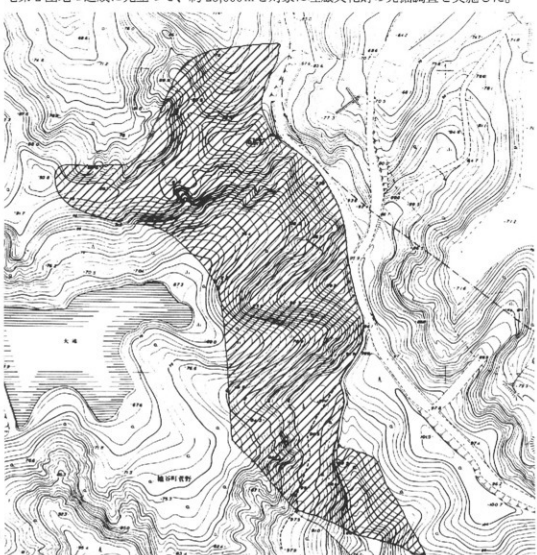


fig. 596
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

今年度調査を実施した4～8区は、地形からみて西方の谷大池から入り込む大きな谷地形で分断され、4～5区と6～8区のまとまりに分けられる。

6～8区の遺構　南北方向の現里道が走る主尾根方向から南へ大きく延びる尾根筋（7・8区）と西方向へ小さく派生する尾根筋（6区）とこれらに挟まれた2つの比較的大きな谷と小さな谷を形成する丘陵斜面で構成される。27棟におよぶ竪穴住居、段状遺構あるいは溝状遺構を含

む落ち込み21基、土坑４基（焼土坑を含む）、壕状遺構２条などの弥生時代中期末～後期初めにかけての遺構と奈良時代前半の蔵骨器１基、時期不明の焼土坑１基などの遺構が確認できた。

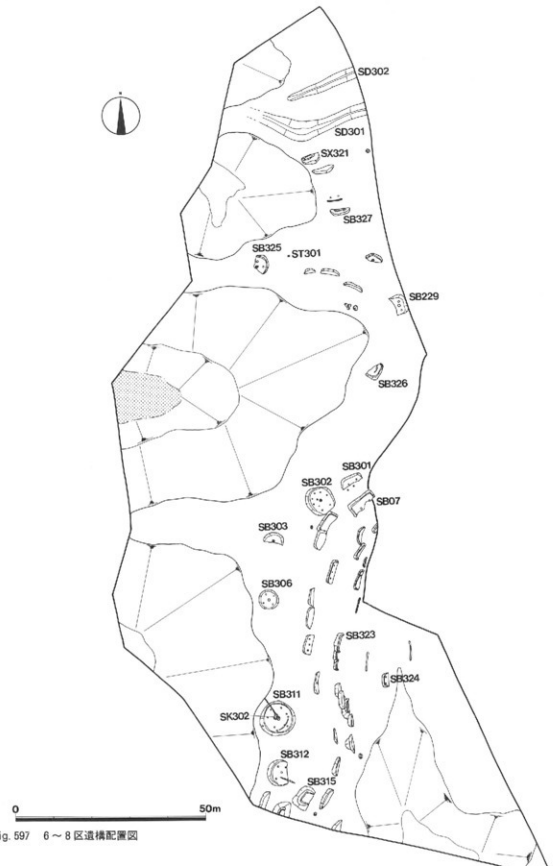


fig. 597　6～8区遺構配置図

S B07　昨年度東半部分について調査したもので、今回の調査で全容が明らかとなった。8区の丘陵斜面上位部下半で確認した隅円方形の竪穴住居で、斜面下位部は流出している。床面では炭化材・焼土が多量に確認されており、焼失住居と考えられる。直径25～30㎝の主柱穴が2基確認されている。床面に密着した遺物は少なく、大型の土器片が多数流れ込んだ状態で検出されている。なお、北西隅付近の周壁溝上面で鉄鏃が1点出土している。

S B302　8区の丘陵頂上部で確認した楕円形の竪穴住居で、主柱穴は7基、柱間距離は2.5m前後である。床面の中央には中央土坑がある。幅15㎝の周壁溝が南西周壁に沿って部分的に確認されている。東壁沿いには磨石が、南壁沿いには台石が据えられている。

S B306　8区の丘陵頂上部で確認した円形竪穴住居である。床面には中央土坑1基と直径30～50㎝の主柱穴が4基確認されている。北側周壁に沿って甕・高杯・鉢などの弥生土器がまとまって出土している。

S B310　8区の丘陵斜面上位部上半で確認した隅円方形の竪穴住居で、斜面下位部は流出している。床面には直径30㎝の主柱穴2基と直径50㎝の土坑1基が確認されている。周壁溝は存在しない。

S B311　8区の丘陵頂上部で確認した円形の竪穴住居である。ほぼ同じ位置での同規模の建て替

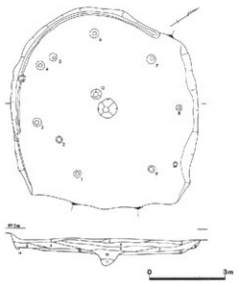


fig. 598　S B302平面図・断面図

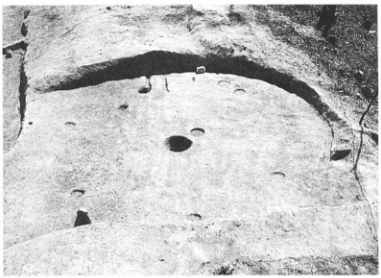


fig. 599　S B302

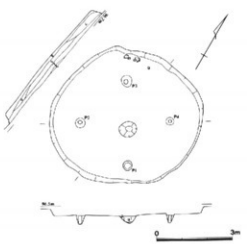


fig. 600　S B306平面図・断面図

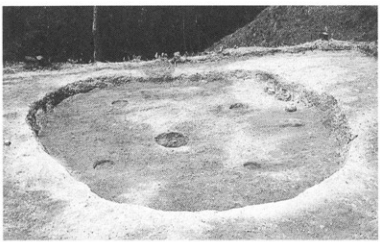


fig. 601　S B306

えが1回行われており、その後焼失して放棄したようで、床面直上で多数の焼土・炭化材が出土している。建て替え前（A）の規模は直径7.5m、主柱穴7基で、中央土坑については不明である。建て替え後（B）の規模は直径7.3m、主柱穴6基で、最大壁高は30cm前後である。床面では直径80cm、深さ25cmの中央土坑と、ここから北方向の周壁外まで延びる長さ6.5mの排水溝1条、東側では周壁溝1条が確認されている。

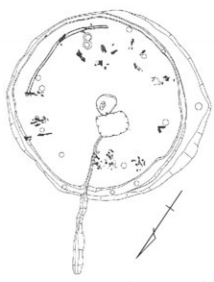


fig. 602　S B311平面図

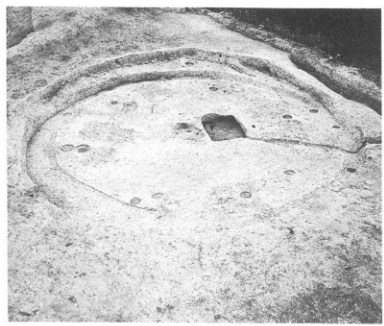


fig. 603　S B311

S B312　8区の丘陵頂上部付近で確認した円形の竪穴住居で、斜面下位部は流出している。幅30cm前後の壁溝をもつ。主柱穴4基、中央土坑1基と住居外へ直線的に延びる幅20～30cmの溝状遺構1条が確認されている。主柱穴はいずれも直径40cmである。中央土坑は直径約60cm、深さ20cmで、埋土に炭粒を多く含む。住居埋土からの出土遺物は少ない。

S B315　8区の丘陵斜面上位部下半で確認した隅円方形の竪穴住居で、斜面下位部は流出している。幅20cm前後の周壁溝と直径1m前後の浅い落ち込み2基を床面で、周壁溝外の床面で2基の主柱穴を確認している。周壁溝内とその上面から完形の壺を含む多くの弥生土器が出土している。なお、埋土最上層より多量の中期末の弥生土器とともに完形の鉄鑿1点が出土している。上位に位置するS B312から流れてきたものであろうか。

S B324　8区の丘陵下位下半部で確認した隅円方形の竪穴住居で、幅30cmの周壁溝が巡る。床面では直径35cm前後の主柱穴2基を確認している。城ケ谷遺跡の調査では、床面の標高が最も低い竪穴住居で、その存在は特異である。

S B325　6区の丘陵斜面上位部上半で確認した竪穴住居で、周壁の残りから円形に近い平面形態であったと推定できる。床面には炭と焼土を多く含む直径60cm、深さ40cmの中央土坑と、浅いピット3基が確認されている。主柱穴は確認できていない。

S B326　7区の丘陵斜面上位部下半で確認した竪穴住居である。床面は緩やかに傾斜しており、主柱穴は確認できていない。東周壁内では壺・甕が、床面中央付近では壺がまとまって出土している。

遺構番号	平面形態	床面標高	規模（m）	床面規模（m）	床面積（㎡）	最大壁高（cm）	主柱穴数	土坑	貯溝	礫石台石	時期	備考
SB07	隅円方形	95.0	6.8×4.3	6.0×3.3		56	2		○		V	竪穴住居
SB301	隅円方形	96.1	6.2×2.9	5.4×2.3		32	2		×			
SB302	楕円形	96.1	8.2×7.4	7.8×6.9		52	7	●	×	②		SB303に切られる
SB303	隅円方形	95.6	7.8×3.0	6.8×2.8		50	1		○			SX301に切られる
SB304	円形？	97.5	6.5×6.0	5.8×6.0		45	1	●	×			
SB306	円形	96.1	6.1×5.4	5.8×5.0		44	4	●	×			
SB307	隅円方形	93.4	4.2×1.6	3.2×0.9		42	?		○			
SB308	隅円方形	94.2	6.0×2.2	4.7×1.1		47	2		○			
SB309	隅円方形	92.9	4.7×1.8	2.5×0.9		55	1		○			第1次SK103と接合
SB310	隅円方形	94.2	5.3×2.7	5.0×2.5		68	2	○	×			
SB311A	円形	95.8	7.5×7.5	7.0×7.0		20	7	●	○			排水溝（長6.5m），柱抜取
SB311B	円形	95.8	7.3×7.3	6.7×6.7		30	6	●	○			排水溝・焼失住居
SB312	円形	96.8	6.3×7.7	4.8×6.5		72	3	●	○		IV	溝状遺構に切られる
SB313	隅円方形	91.9	7.1×2.5	3.8×0.9		59	?		○			拡張？
SB314	隅円方形	91.9	4.3×0.8	2.3×0.3		40	?		○			
SB315	隅円方形	93.9	4.8×5.2	4.6×2.9		60	2	②	○			
SB316	隅円方形	92.5	7.0×1.8	4.5×1.2		71	?		②			
SB317	隅円方形	95.0	2.2×0.7	1.8×0.4		37	?		○			段状遺構SX308を伴う
SB318	隅円方形	93.0	3.4×1.3	3.0×0.9		50	?		○			
SB319	隅円方形	90.0	3.9×2.7	3.6×0.7		99	?		○			SB319を切る
SB320	隅円方形	89.7	3.7×1.1	2.6×0.5		37	?		○			SX311に切られる
SB321	隅円方形	90.9	3.6×1.6	2.9×0.7		95	?		○			SB322を切る
SB322	隅円方形	90.9	6.0×1.5	5.1×0.6		86	?		○			
SB323	隅円方形	90.9	5.8×2.2	4.8×0.9		91	?		○			SB322を切る
SB324	隅円方形	83.6	5.4×2.8	4.5×2.1		80	2		○			
SB325	円形	93.8	5.0×3.9	4.3×3.7		50	?	●	○		IV？	復元径6.0m
SB326	隅円方形	93.8	4.0×2.3	3.3×1.7		45	?		○			床面に溝あり
SB327	隅円方形	96.9	6.2×2.3	3.3×0.5		63	?		○			
SX330	隅円方形	95.7	7.2×4.8	6.5×4.1		45	2	○	×		IV	上層から須恵器出土

城ケ谷遺跡竪穴住居一覧

SD301　6区の丘陵主尾根の鞍部を横断するように東西方向に開削された壕状遺構である。最大幅約3.9m、最大深さ約1.5m、総延長約30mで、標高86m付近から北西方向へ屈曲して延びた後の下位部分は水ミチとなっている。断面は鈍いV字形である。埋土下層からは完形に近い弥生土器がまとまって出土しており、上層では奈良時代前半の須恵器とともに多量の弥生土器片が出土している。

SD302　6区の丘陵主尾根の鞍部を横断するように開削された壕状遺構で、SD301の約12m北側に平行して位置する。最大幅約3.4m、最大深さ約1.2m、総延長約13mで、断面は鈍いV字形である。標高87m付近より下位部分は水ミチとなり、遺構肩部は不明瞭である。なお、埋土はSD301とはやや異なり、焼土を含む灰色系粘土が主に堆積している。物には最下層からの弥生土器があるが、平安時代後期の須恵器椀の小片も出土している。なお、SD301とSD302の先後関係については、現状では不明である。

6・7区間谷部　上述したように、谷部での堆積土量が極めて多かった調査区である。調査区端の土層断面は、無遺物の青灰色砂礫層の直上に堆積した青灰色シルト質細砂内に大型の自然木が多量に検出できた。この自然木を覆う灰色シルトから弥生土器が比較的まとまって出土している。この状況から、集落形成に近い時期にこれらの自然木が堆積したものと考えられる。明確な伐採痕跡が確認できていないものの、当時切り倒された樹木ではないかと推定できる。

SK302　SB311床面で確認した長軸125㎝、短軸90㎝、深さ25㎝の焼土坑である。坑壁は袋状で、ほぼ全面が焼成を受け赤化している。また、埋土には大型の焼土塊と炭粒を多く含んでいる。SB311の埋没過程で掘り込まれたもので、埋土上層から少量の須恵器片が出土しており、奈良時代前半の遺構と考えている。

蔵骨器
ST301　6区の緩やかな尾根稜線上の斜面で確認された奈良時代前半の蔵骨器で、弥生時代後期の包含層（流土）を切り込んで営まれている。直径30㎝、深さ約15㎝のピット内に火葬骨を充填した須恵器の壺を据えたものである。上面で須恵器壺の口縁部と土師器坏片が出土していることから、もともとは土師器坏で蓋をしてあったようである。

fig. 604　6～8区全景

fig. 605　6～7区谷部全景

fig. 606　8区全景

fig. 607　8区丘陵頂部全景

4～5区の遺構　調査対象範囲中最北端の尾根部分を4・5区とした。検出できた遺構には、弥生時代中期末の落ち込み1基、弥生時代中期末～後期の墳状遺構1条、古墳時代後期末の墳状遺構1条、奈良時代前半の蔵骨器2基および時期不明の焼土の詰まった土坑などがある。基本層序は、表土下に蔵骨器の検出面となる乳黄灰色砂質土（弥生土器を含む間層）、弥生時代の遺構面となる地山の順である。

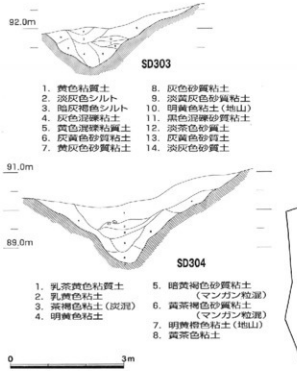


fig. 609　SD304・303断面図

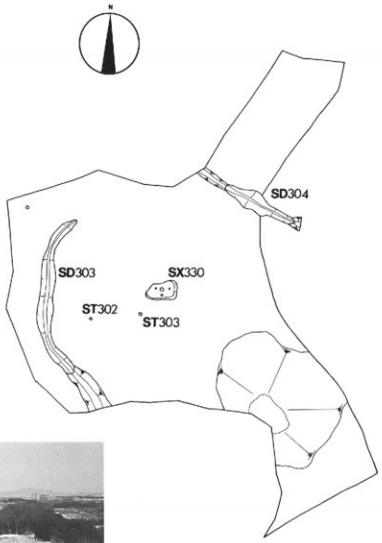


fig. 608　4～5区遺構配置図

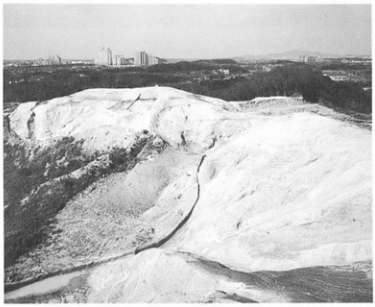


fig. 610　4～5区全景

ＳＸ330　4区で確認できた弥生時代中期の竪穴住居の可能性の高い落ち込みで、丘陵のほぼ頂上付近で検出した（床面標高96.0m）。検出した平面形は、長軸7.2m、短軸4.8m、最大壁高45cmの隅円方形であるが、斜面下位部分が流失している。床面で確認できた遺構には柱穴2基、ピット1基、中央土坑様の長径1mの楕円形の土坑1基がある。遺構埋土内からは、弥生時代中期末を主体とする遺物が出土しており、当期の住居址の可能性が高い。なお、埋土上層から古墳時代後期末の須恵器高杯が完形で出土しているが、後世の流入と考えられる。

蔵骨器

ＳＴ302　5区の丘陵尾根の南向き斜面で検出した。検出面は地山面であったが、本来は弥生土器を含む乳黄灰色砂質土から切り込まれたピット内に須恵器の壺が据えられたものと考えられる。壺の斜面下方側に張り付くように須恵器杯蓋を検出しており、本来は杯蓋で蓋をしてあったものが流されたと考えられる。

壺内部は火葬骨片を含む砂が充満していた。

ＳＴ303　ＳＴ302の東側約10mで確認した。検出面を形成する乳黄灰色砂質土は弥生土器を含む。直径50cm、深さ15cmのピット内に平底の土師器の甕を据えたものである。甕内部は無遺物であったが、本来は火葬骨が納められていたものと考えられる。

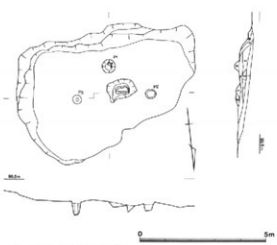


fig. 611　ＳＸ330平面図

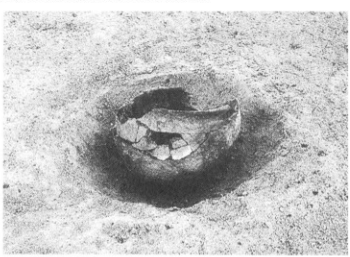


fig. 612　ＳＴ303

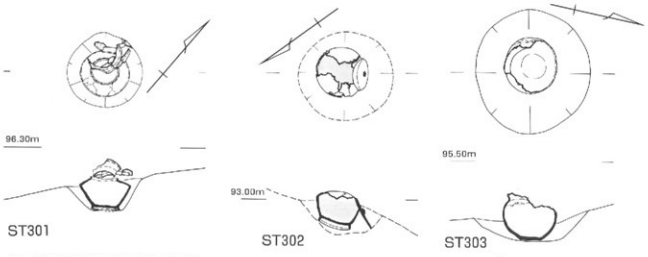


fig. 613　ＳＴ301～303平面図・断面図

fig. 614　SD303

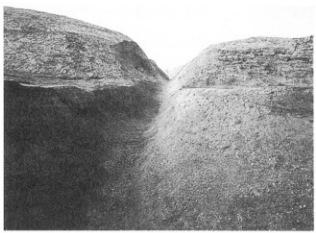


fig. 615　SD304

壕状遺構

SD304

4区の尾根を東西に切断するように開削されている。最大幅4.7m、最大深さ2.0m、確認された長さは18.3mで、両端は水ミチと化している。埋土内からは上層で古墳時代の須恵器片を1点検出したものの、中層は無遺物、下層で弥生時代後期の土器が出土しており、弥生時代後期のものと考えている。

SD303

調査区西端の4・5区で検出した。これまでに確認できた他の壕状遺構とは異なり尾根を取り巻くように緩やかな円弧を描く。最大幅3.8m、最大深さ1.6m、確認された長さは39.5mである。両端は谷へ下る水ミチに収斂されている。埋土内最下層から古墳時代後期の土師器が、中層からは古墳時代後期末の須恵器が、上層からは弥生時代後期と奈良時代前半の土器が出土している。ここでは古墳時代後期に開削され、奈良時代前半にはほぼ埋没していたものと考えておきたい。

出土遺物

出土遺物は、28ℓ入りのコンテナで約100箱を数える。多量の弥生土器（弥生時代中期末～後期初め）と鉄製品（鉄鏃・鉄鑿各1点など）、磨製石器（石包丁・石斧各1点など）、打製石器（石鏃・刃器など）などがある。また、蔵骨器として使用された須恵器，土師器など奈良時代前半の土器もあり、流土中からの古墳時代後期末～奈良時代前半の須恵器も散在的に出土している。

3．ま と め

これまで明石川流域で発見されてきたいわゆる高地性集落は、弥生時代中期後半のものがそのほとんどであった。城ケ谷遺跡での中期末～後期初めに概ね限定できる大規模な高地性集落の発見は特筆できるもので、当時あったと想定される戦乱が明石川流域のこの地域でも六甲山南麓地域と同様に後期まで継続していたことが明らかとなった。

城ケ谷遺跡でこれまでに確認できた主要な遺構は、いずれも等高線に平行して地山を掘り込んで営まれている。竪穴住居はこれまでに確認された35棟を含めると、今回の調査で合計62棟が確認されたこととなる。上述したように、6～7区間の大きな谷からは、大型の焼土塊や炭化材とともに多量の弥生土器が出土しており、もともとこの谷を囲む丘陵斜面にも竪穴住居などの遺構が多数存在していたものと推定される。本来は城ケ谷遺跡全体で100棟近くの住居の存在が想定できる。

さらに、今回確認できた壕状遺構（SD301・302）は、城ケ谷遺跡の北限を画するものとして重要な発見である。昨年度確認された9区SD01との直線距離は約230mであり、

調査対象地区外のため８区以南に続く丘陵上の遺構の存在が不明であるものの、壕で区画された範囲に居住域が限定されて営まれていたものと推定できる。壕が集落全体を囲まないものの、近畿地方でも類例の少ない壕をもつ高地性集落遺跡のひとつとして数えられる。また、10区ＳＤ1001と今回確認できたＳＤ304の存在も合わせて考えると、自然地形をも巧みに利用しながら内壕・外壕を開削した二重の壕をもつ高地性集落と言えそうである。

しかし一方で、高地性集落と呼称しながらも、視野が狭く、沖積地からかなり奥まって立地する点はこれまで発見されてきた明石川流域の眺望の効く高地性集落と比較して特徴的である。こうしたかなり閉鎖的に立地する集落遺跡に尾根筋を切断開削する壕状遺構が営まれ、居住域を画する意味はどこにあるのか。これまでこうした壕状遺構は外的から集落を防御する機能をもつものとされてきているが、城ケ谷遺跡では集落の性格を考えていく上でも示唆に富むものと言える。

また、出土土器からみると、弥生土器では在地産の土器が多数を占めるのは明白であるが、香川県の胎土で製作された壺形土器や岡山県南部地域で製作される土器の特徴をもつ土器なども含まれており、さらに遺物整理が進めば当時の地域交流の一端を明らかにできるものと考えられる。また、鉄製品が若干量確認できたことも特筆できる。利器が石の道具から鉄の道具へと変化していく時期の良好な資料と言える。

さて、弥生時代以降の遺跡として、古墳時代後期末に開削された壕（ＳＤ303）と奈良時代前半期の蔵骨器を合計６基確認できた上、古墳時代後期末～奈良時代前半の遺物を散在的に確認することもできた。この事実は弥生時代の高地性集落が廃絶した後、古墳時代後期末から奈良時代にかけても城ケ谷遺跡の丘陵に古代人の出入りのあった証拠であり、奈良時代前半期には城ケ谷遺跡の丘陵全域が墓域として利用されていたことを端的に物語るものである。蔵骨器の分布からみて、南あるいは西方向に延びる丘陵尾根筋の南向きの緩斜面にいずれもが占地していることから、それぞれの墓域が限定されていたことも推測される。現状では平野部での当該期の集落遺跡と直接結びつく資料がないものの、菅野、谷口あるいは栃木などがその有力候補地として挙げられよう。

fig. 616
調査区遠景

以上のように、平成7年度に始まった城ケ谷遺跡の埋蔵文化財の現地全面発掘調査は、3年を迎え、ここに漸く終わりを告げた。城ケ谷遺跡は弥生時代中期末～後期の大規模な高地性集落であるとともに、遺構の頻度は低いものの古墳時代後期末・奈良時代前半・平安時代後期の遺跡であることも判明した。さらに今後膨大な資料の整理作業を通して、改めて遺跡の重要性が浮き彫りになってくるものと考えられる。

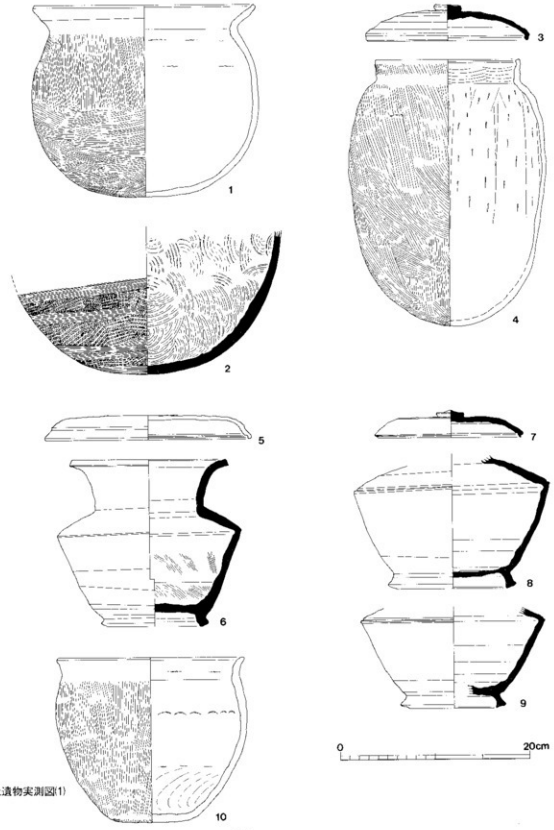


fig. 617　出土遺物実測図(1)

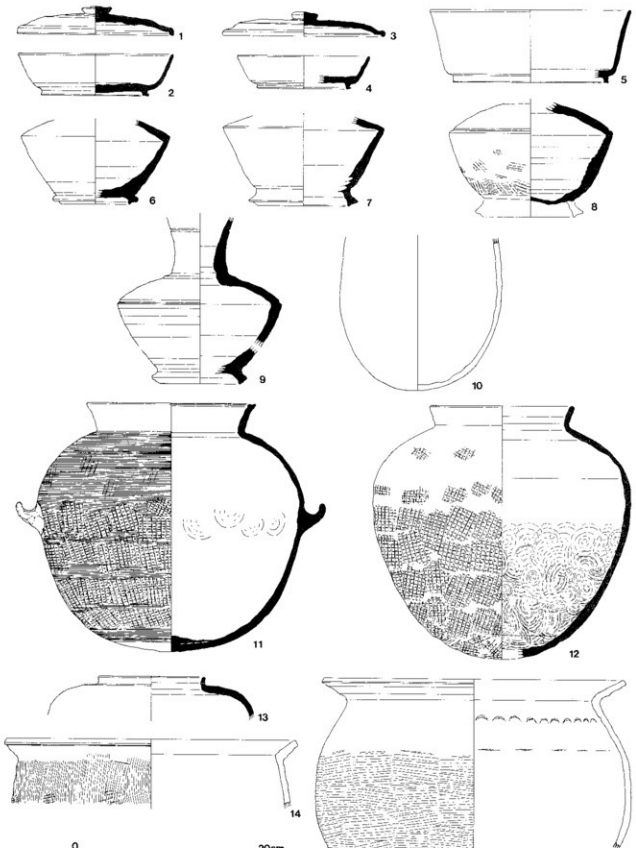


fig. 618　出土遺物実測図(2)

Ⅲ．平成９年度の通常事業に伴う発掘調査

１．坊ケ塚古墳　試掘調査

１．はじめに

今回の調査付近の地名は、かつては住吉町坊ケ塚とよばれており、住吉神社に残る絵図には「坊ケ塚」と書かれた古墳が描かれている。この古墳はその形からは前方後円墳であったと推定されており、今回の調査地は地籍図等の地割りからこの「坊ケ塚」の後円部にあたると考えられていた。

坊ケ塚古墳の周辺は、住吉宮町遺跡として昭和60年以降20次以上の発掘調査が行われ、古墳時代初頭（庄内併行期）の住居址や周溝墓、古墳時代中期から後期にかけての古墳群が見つかっている。そのなかでも今回調査地の南西約150ｍにある住吉東古墳は全長24ｍの帆立貝式古墳で、墳丘には人物や馬の形象埴輪をはじめとする埴輪列が巡らされていた。また、今回調査の南側に隣接するＪＲ住吉駅ビルの建設や、今年度調査を行った西側隣接地でも古墳や周溝墓が確認されている。このように近年の発掘調査により、かつては「坊ケ塚」を取り巻くように方墳が近接して築かれていたことが明らかになりつつある。

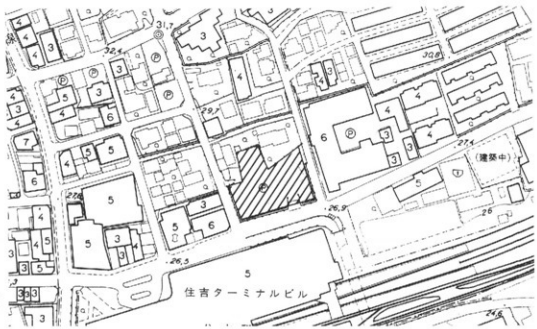


fig. 619
調査地位置図
１：2,500

２．調査の概要

今回の調査は、駐車場の立体化計画に先立ち、「坊ケ塚」の所在および残存の有無とその状況を確認するために実施した。

Ｉ　区

調査地の南側に設定した上端で幅4.5ｍ、長さ27ｍの試掘溝で、実調査範囲は幅１～1.5ｍ、長さ23ｍであった。基本層序は、現地表下約２ｍまで現代の撹乱層（盛土層）で、その下層は東半部では褐色砂礫～砂が主体、西半部では水田層の堆積が見られる。調査の結果、東半部の砂礫層は既に削平された古墳の墳丘であり、水田層は墳丘裾部の後世の堆積土であることが明らかになった。

墳丘斜面および裾部と考えられる落ち込みは、北西－南東方向で検出され、裾部には葺石と考えられる拳大～人頭大の円礫が崩れ落ちた状態で見られた。

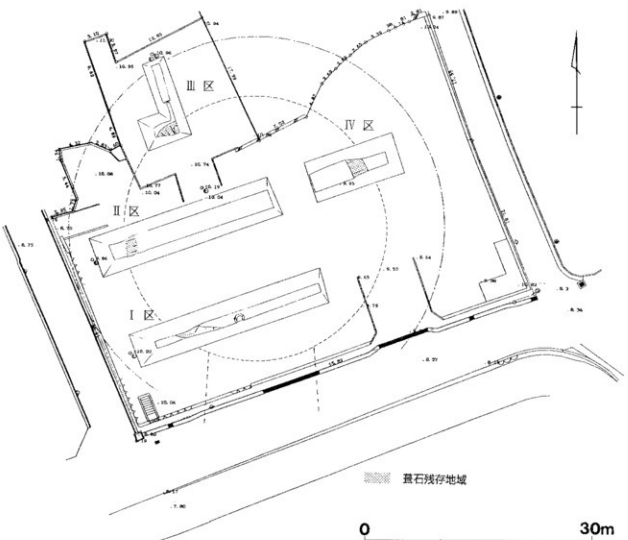


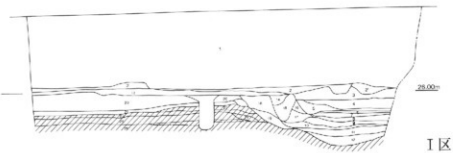
fig. 620　調査区平面図

Ⅱ　区　調査地の中央部に設定した上端で幅5.5m、長さ25mの試掘溝で、実調査範囲は幅2.5m、長さ22mであった。Ⅰ区の層序とほぼ同様であり、調査区西端で、墳丘裾部が検出された。墳丘斜面の現存高は1m弱であるが、葺石は比較的良好に残っていた。この周濠底からは古墳時代の須恵器片が出土した。

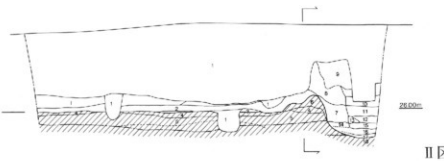
Ⅲ　区　調査地の北端部に設定したL字形の試掘溝で、この調査区は調査地内でも現況が約1m高い部分である。現況地盤から約1.5mは現代の盛土である。北西側へ落ち込む墳丘斜面と周濠部分が検出された。崩落した状態の葺石を多量に含む土層からは、中世の土器（土師器・瓦器等）が出土しており、この部分では中世の時期に一部古墳を削平し開墾した可能性がある。

Ⅳ　区　Ⅰ～Ⅲ区の調査結果を踏まえて、墳丘西裾部を検出するためにⅡ区の西側延長上に設定した試掘溝である。調査の結果、ほぼ推定された位置で墳丘西側斜面と裾部が確認できた。斜面の残存高は約1.1mで、葺石も良好な状態で残存していた。葺石は人頭大以上の円礫が多く用いられている特長がある。

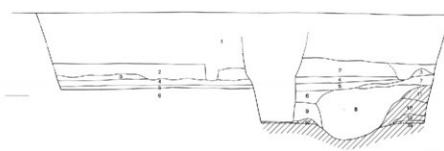
墳丘規模　調査の結果から、当調査地内には「坊ケ塚」の後円部の大部分が含まれていることが明



Ⅰ区南壁
(縦1/100・横1/250)



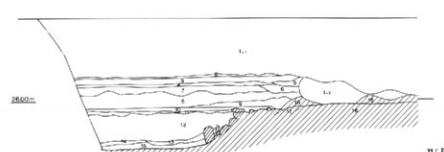
Ⅱ区南壁
(縦1/100・横1/250)



Ⅲ区東壁

○斜線部は墳丘

Ⅲ区南壁



Ⅳ区南壁

fig. 621　調査区断面図

0　5m

らかとなった。検出された墳丘裾部から推定される後円部の直径は約35mである。ただし、今回の調査において前方部との境であるくびれ部が検出されなかったことから、古墳の方向および全体の規模はは明らかにすることは出来ないが、おそらくほぼ南北方向を軸とすると考えられる。また、周濠の外側の部分は調査範囲内では検出されなかったため、周濠を含めた規模についても明確ではない。

中世遺物　墳丘は近世もしくは近代になってから削り取られてしまったようであるが、周濠を含む墳丘外については、堆積土層から中世以降水田として利用されていたことが判る。また、地形的に上位のⅢ区では葺石と考えられる円礫を多量に含む土層から中世の土器類が多く出土しており、中世もしくはそれ以後の古墳の開墾によるものと考えられる。出土遺物からみて、中世の集落址が付近に存在する可能性も高い。

3．ま と め

今回の試掘調査により、「坊ケ塚」と考えられる古墳が当地内に存在することが明らかとなった。古墳は、後世の削平により墳丘の上半部が大きく失われているが、裾部については良好に残存していることが判った。

現存する絵図などから、前方後円墳と考えられている「坊ケ塚」は今回の調査では前方部は検出できなかった。南側に近接するＪＲ住吉駅ビル（シーア）建設の際の調査においても「坊ケ塚」の前方部はその範囲にかかっておらず、これらから推定すると、帆立貝式古墳の可能性も考えられる。

今回の試掘調査により、今後の調査によって墳形や規模、築造時期などを明らかにできうることが確認され、また「坊ケ塚」の所在が、この調査によって初めて確認できたとも言える。

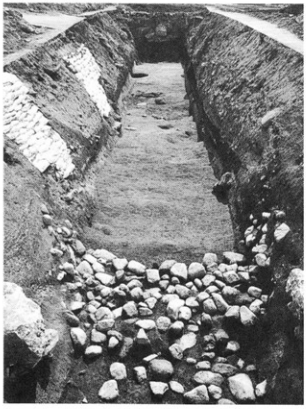


fig. 622　Ⅱ区葺石検出状況

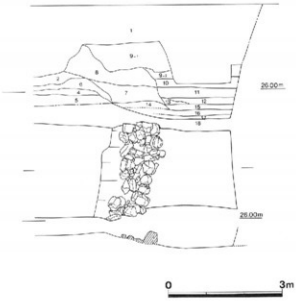


fig. 623　Ⅱ区葺石平面図・断面図

2．住吉宮町遺跡　第29次調査

1．はじめに

住吉宮町遺跡は、六甲山麓から南に流れる住吉川と石屋川によって形成された扇状地に立地し、標高約20mのところに位置している。

昭和60年、住吉宮町7丁目でのマンション建設工事の際に鎌倉時代の土坑及び土器が発見され、遺跡の所在が明らかになった。その後、調査は今回で29次を数え、弥生時代終末期から鎌倉時代にかけての複合遺跡であることが明らかとなってきた。

周辺の遺跡

当遺跡の北東約10mに、全長約40mの前方後円墳、坊ケ塚古墳があったとされ、さらに南約10mには、全長24mの帆立貝式古墳、住吉東古墳が確認されている。またこれまでの調査で、周辺に群集する小型の方墳が発見されており、当地も含めて、ある集団の大きな墓域が想定されている。

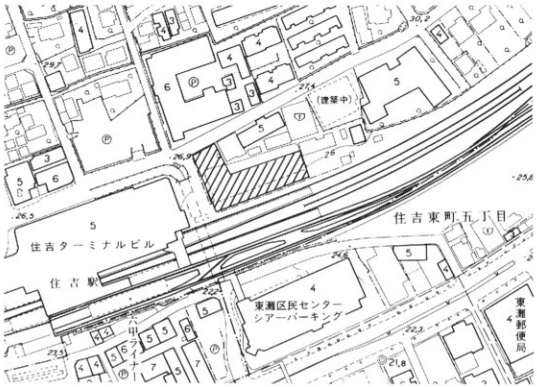


fig. 624
調査地位置図
1：2,500

2．調査の概要

今回の調査は、スポーツ施設等の建設に伴うもので、建物基礎部分で埋蔵文化財に影響の及ぶ約800㎡を対象として調査を開始した。

なお、工程上Ⅰ～Ⅲ区の調査区を設定し順次調査を実施し、うちⅠ区は、掘削制限のため近世～中世包含層上面までの調査に終わった。

今回の調査で検出した遺構は、弥生時代中期の溝・弥生時代終末期の

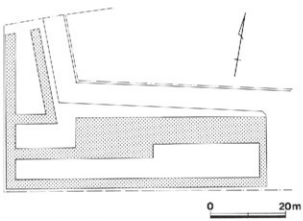


fig. 625　調査区設定図

溝・古墳時代後期の方墳６基・竪穴住居・古代～中世の建物・土坑・ピット等である。

弥生時代中期　この時期の遺構としては、溝状遺構を３条検出した。

ＳＤ08　Ⅲ区の南端、４号墳南側周溝下層より検出。幅約2.5ｍを測り東西にのびる。最下層より、弥生中期の壺（２個体）が出土している。

ＳＸ02　Ⅲ区南東で検出、幅１ｍ、長さ1.5ｍ以上の溝状の落ち込み。最下層より、弥生中期の甕が出土している。

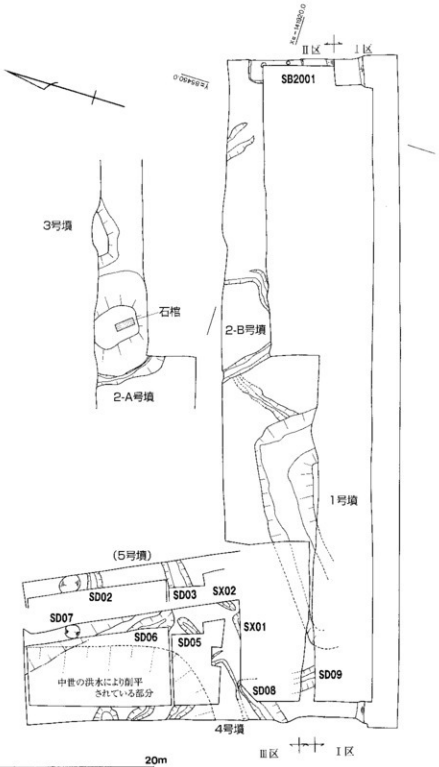


fig. 626
弥生～古墳時代遺構面平面図

弥生時代終末期　この時期の遺構としては、溝状遺構を２条検出した。

ＳＤ05　Ⅲ区、５号墳南側周溝下層より検出、幅１ｍ、深さ0.3ｍ。最下層より、弥生時代終末期の蛸壺型土器が出土している。

ＳＤ06　Ⅲ区、５号墳南側周溝下層より検出、幅2.5ｍ、深さ0.55ｍ。埋土より弥生時代終末期の鉢が出土している。

ＳＤ07　Ⅲ区北半部で検出した落ち込み状遺構。おそらく、古墳時代以前の自然の谷状地形の一部であると考えられる。

ＳＤ09　Ⅱ区の西端で検出、幅約2.5ｍで南北にのびる。出土遺物はなく、時期は不明であるが検出位置と方向から考えて、ＳＤ08と一連のものである可能性が高い。

fig. 627　ＳＤ08

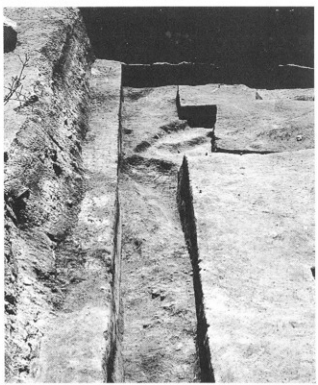


fig. 628　ＳＤ05・06

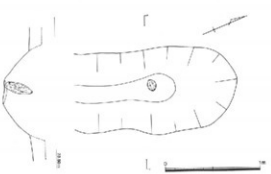


fig. 629　ＳＤ06平面図・断面図

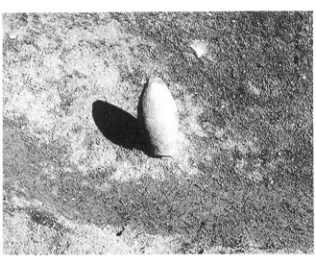


fig. 630　ＳＤ06内遺物出土状況

古墳時代後期　この時期の遺構としては、6基の古墳・竪穴住居1棟・溝状遺構を検出した。

1号墳　Ⅱ区で検出した、一辺約20mと推定される方墳である。墳丘高約0.7mで、墳丘の斜面には、10～40cm大の円礫を用いて葺石としており、比較的大きい石で基底部を形成している。大部分は、花崗岩である。

墳丘斜面及び周溝内より、須恵器や土師器、円筒埴輪、鉄鏃、滑石製勾玉が出土している。なおⅠ区西半部の断ち割り調査で、樹立した円筒埴輪が2基出土した。おそらく、1号墳の墳頂部と考えられる。大部分は調査区外に延びており、主体部も確認できていない。

2－A号墳　Ⅱ区で検出した、一辺約10m前後の方墳である。墳頂部に花崗岩を用いた箱式石棺を持つ。石棺の内法185×40cm、蓋石の数8枚（現存7枚）、底部に5～10cm大の円礫を敷きつめている。主軸は、ほぼ南北方向で、棺内から遺物は出土しなかった。なお、明確な周溝は持たないようである。

fig. 631　1号墳

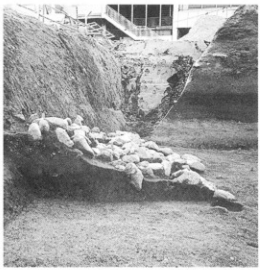


fig. 632　1号墳墳丘断面

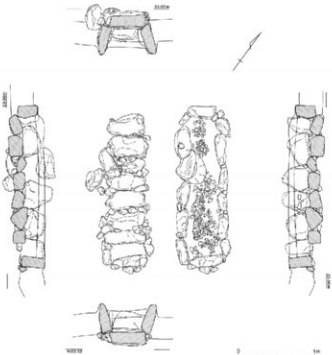


fig. 633　石棺平面図・断面図

fig. 634　石棺

2－B号墳　2－A号墳下層で検出した一辺約10m前後の方墳である。周囲に幅約1m、深さ約0.15mの周溝がめぐり、西側周溝上面より須恵器や土師器、滑石製臼玉が出土している。主体部は確認できなかった。

2－A号墳・2－B号墳については、以下の様に考えている。

2－B号墳を造った後、周溝がある程度埋まった段階で、2－B号墳の墳丘を利用し、整地、盛土を行って2－A号墳を造ったと考えられる。なお、2－B号墳西側裾部に見られる投棄された状態の土器・葺石と思われる礫は、2－A号墳築造の際の整地、盛土によると推定される。

3号墳　Ⅱ区、2－A号墳と近接してある、一辺5m以上の方墳である。大半は、調査区外に延びているため、詳細は不明である。盛土中より、須恵器・土師器が出土している。

4号墳　Ⅲ区西南部、弥生時代の溝（SD08）の上部で検出した一辺7m以上の方墳である。伏見地震の墳砂の影響で、周溝の肩は検出できていない。墳丘のコーナーから、5世紀後半代の須恵器（蓋坏5セット・壺）が、出土している。

fig. 635　2－A号墳

fig. 636　2－B号墳

fig. 637　4号墳遺物出土状況

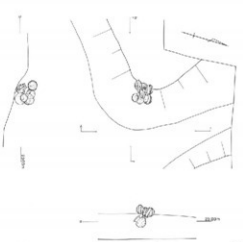


fig. 638　4号墳遺物出土状況平面図

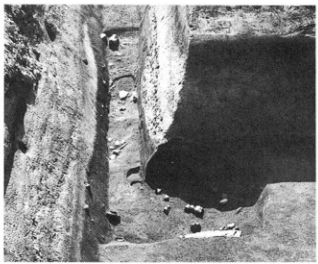


fig. 639　S B2001

fig. 640　Ⅲ区遺構面全景

5号墳　Ⅲ区西側で平行する溝2条を検出（S D02・S D03）。S D03内から須恵器壺が出土したため、これが古墳の溝であると考えた。一辺8m以上。

なお、4号墳同様、古墳の西半部は、中世の洪水で削られていると考えられる。

S X01　Ⅲ区南西端で検出。深さは最深部で70cm、ちょうどコーナー部にあたるが、大半は調査区外にあるため詳細不明。埋土内より須恵器片出土。

S B2001　Ⅱ区西端部で検出、南北6m、東西2.5m以上、深さ0.35mを測る方形の竪穴住居で、床面に柱穴2基を検出。埋土より、須恵器・土師器が出土している。

古代～中世　古代・中世の遺構面は、同一面で検出された。検出された遺構は、掘立柱建物2棟・溝2条・土坑・ピット270以上等である。大部分は、Ⅱ区で検出した。

S B01　2間×3間以上で東西に長い掘立柱建物。柱穴掘形は直径0.3～0.5m、柱間距離は2.0～2.5mである。柱穴内より鎌倉時代の須恵器・土師器が出土している。また、そのうちの1つは、土師皿と刀子を柱穴底に埋納しており、地鎮行為と考えられる。

S B02　2間×2間以上、柱穴掘形は直径0.15～0.2m、柱間距離は1.8～2.0mである。柱穴内より鎌倉時代の須恵器、土師器が出土している。そのうちの1つは、S B01同様、柱穴底に土師皿・刀子を埋納している。

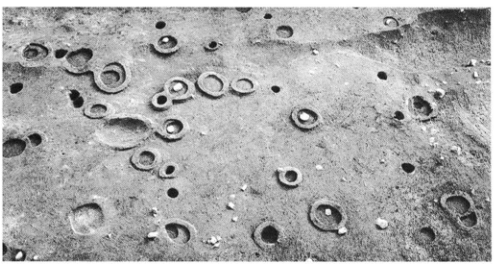


fig. 641
S B01・02

fig. 642　Ⅱ区古代～中世遺構面全景

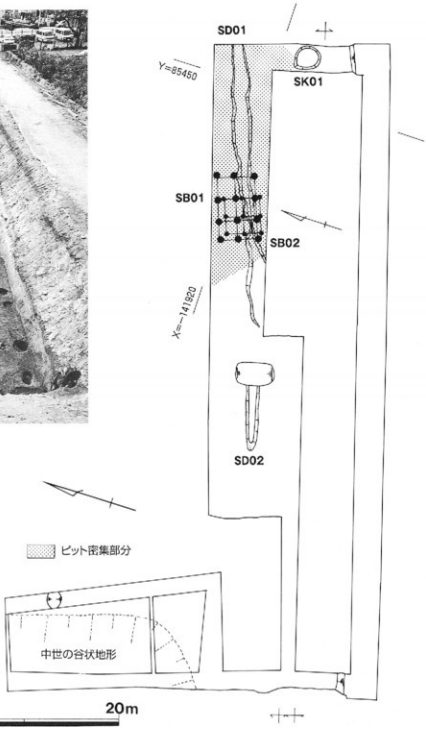


fig. 643
古代～中世遺構面平面図

SD01　　幅1ｍ～２ｍ、長さ30ｍ以上、深さ0.15～0.3ｍ。埋土より平安時代後期の須恵器・土師器・緑釉陶器・灰釉陶器・鉄製品が出土している。

SD02　　幅1.5ｍ、長さ７ｍ以上、深さ0.1ｍ。埋土より平安時代の須恵器、土師器が出土している。

SK01　　直径2.2ｍの円形で深さ0.35ｍ。上層には炭が一面に堆積しており、その下層から、平安時代後期の羽釜が出土している。

ピット　　特にⅡ区西半部で集中的に検出された。掘立柱建物の柱穴と考えられるものがほとんどであり、今後、建物の復元作業が必要である。

3．ま と め　今回の調査では、古代～中世、古墳時代後期、弥生時代終末期の各遺構に加えて、今までの調査では見つかっていない弥生時代中期の遺構を検出することができた。

古代～中世の遺構面については、多くのピットを検出した。おそらく、何棟かの掘立柱建物が復元できると思われる。

古墳時代後期については、6基の方墳を検出した。特に2号墳は、同じ場所に2回も古墳を造営しており、住吉宮町周辺に小型の方墳が密集している様子が再度確認できた。また、第9・13次調査同様、古墳とほとんど時期差のない竪穴住居が近接して存在しており検討する必要がある。

弥生時代終末期についてはSD05内より、他に類例を見ない蛸壺型土器が出土しており今後の検討が必要である。

弥生時代中期については、3条の溝状遺構を検出した。SD08とSD09については周溝墓である可能性もあり、今後の調査の進展が待たれる。

その他、今回の調査で特筆すべきことは、1596（慶長元）年に京都から神戸にかけて起きた伏見地震による地震跡（墳砂）が、多数検出されたことである。（寒川旭氏の現地調査による）調査区内で、計6ヶ所、土層のはぎ取りを行った。

1. 盛土
2. 青灰色粘土
3. 黄褐色微砂
4. 灰色シルト
5. 明茶色砂質土
6. 暗灰色砂質土
7. 暗褐色砂質土
8. 明茶褐色砂質土
9. にぶい明茶褐色砂質土
10. にぶい暗茶褐色砂質土
11. 明灰褐色砂質土
12. 暗灰褐色砂質土
13. 褐色砂質土
14. 明黄褐色砂質土
15. 黒茶褐色砂質土
16. 暗茶褐色砂質土
17. 褐色細砂
18. にぶい黄褐色シルト
19. 灰褐色シルト
20. にぶい黒褐色砂質土
21. 暗褐色粗砂
22. 暗褐色粗砂
23. 浅黄茶褐色砂質土
24. 褐赤灰褐色砂質土
25. にぶい黄赤褐色砂質土
26. 浅黄褐色細砂
27. 褐黄褐色細砂
28. 明茶褐色粗砂
29. にぶい灰茶褐色細砂～シルト
30. 黒褐色砂質土
31. 明黄茶褐色粗砂
32. にぶい褐色粗砂
33. 暗茶褐色粗砂
34. 明茶褐色細砂
＊7層上面→中世遺構面
＊26層～34層→1号墳墳丘

fig. 644　調査区断面図（Ⅱ区南壁）

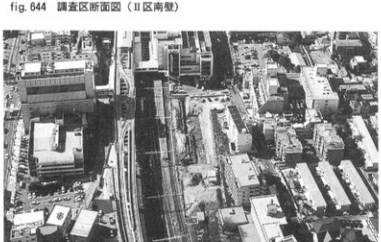


fig. 645　調査区遠景

fig. 646　噴砂痕断面